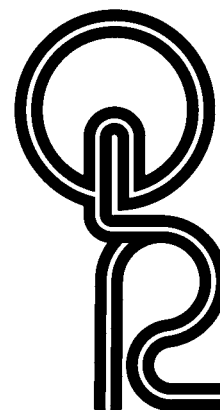


# QR Newsletter



## 第四紀通信

Vol. 27 No.5, 2020



2020年オンライン表彰式にて、各賞受賞者および名誉会員の皆様。左上から横に、石原与四郎会員(論文賞)、齋藤文紀会長、平林頌子会員(若手学術賞)、北村晃寿会員(学術賞)、岩田修二会員(名誉会員)、海津正倫会員(名誉会員)、小野有五会員(功労賞)、後藤憲央会員(論文賞)、岡田 誠会員(功労賞: Chiba composite section research community を代表)、佐々木 華会員(論文賞)。2020年8月29日撮影。

Vol. 27 No. 5

October 1, 2020

新型コロナウイルス感染症への対応と 2020年度の事業計画..... 2	2021年大会案内(第1報)..... 12
2020年大会概要..... 3	評議員会議事録..... 12
学術賞・若手学術賞受賞者報告..... 4	総会議事録..... 25
論文賞受賞者報告..... 7	執行部会議事録..... 26
功労賞受賞者報告..... 9	所属領域の変更手続きと会員マイペー ジの利用推進について..... 27
オンライン総会運営報告..... 10	会員消息..... 28

## ◆新型コロナウイルス感染症への対応と 2020 年度の事業計画

会員の皆様も新型コロナウイルス感染症の影響を受けて困難な時期をお過ごしかと思います。本年 2 月以降の新型コロナウイルス感染症の蔓延により、日本第四紀学会の活動も大きな影響を受けるようになりました。2 月末に予定していた 2019 年日本第四紀学会学会賞・学術賞受賞記念講演会は延期となり、対面による評議員会や執行部会の開催も困難な状況に陥りました。合わせて 4 月からは大学における授業が遠隔授業に移行したことから、その対応により執行部会のメンバーも多忙となり、5 月に入ってやっとオンラインによる執行部会の開催ができるようになりました。

日本第四紀学会では 8 月からの新しい年度を迎えるにあたり、総会については毎年 1 回以上の開催となっており、前年度の活動報告と決算、新年度の事業計画と予算を決めることが会則によって決まっています。一方、大会については大会運営規程において年 1 回となっており、総会と分けて開催するためには総会と同じく年 1 回以上の開催ができるように大会運営規程の改定が必要であることがわかりました。このため 7 月に行われた評議員会において改定を行い、総会と研究発表を中心とする大会とを分けて実施し、総会についてはオンラインで実施することを決定しました。最終的に、大阪大会は 1 年延期し、総会はオンラインで予定通りの日程である 8 月 29 日に実施し、大会については会員へのアンケートの結果を受けて判断することに致しました。大会についてのアンケートを 8 月上旬から中旬に実施し、203 名の回答があり、オンライン大会の開催への賛同が多かったことから、2020 年度第 1 回評議員会及び総会において、オンラインで研究発表を中心とする 2020 年大会を 2020 年 12 月 26～27 日に実施することを決定しました。延期になっていた学術賞受賞記念講演会についても大会中の実施を計画しています。詳細については、会員へのメール配信とホームページにおいて 10 月上旬までに皆様に連絡する予定です。

今年度予定していた大阪での大会は、来年度に延期し実施の予定です。各地域で毎年行ってきた大会は、会員の親睦、研究交流の促進、各地域の第四紀研究の発展、また当該地域の地形、地層、考古などに接することができる巡検などは、学会や日本の第四紀研究の発展にとって重要な活動です。これについては、今年度は実施できませんが、継続して各地域において毎年行ってゆきたいと思っています。

一方、今回の新型コロナウイルス感染症によって新しく始まったオンラインの活動は、全国の会員の皆様への会員サービスを考えると、利点の多い重要な活動と認識しています。オンラインの活動を活かしてゆくことが今後の学会活動に重要となることは間違いありません。オンラインの活動は、移動や参加などにおいて拘束する時間が限定され、有効に時間を活用でき、簡便であり、交通費用もかかりません。特に、長く拘束されないことから、一部だけの参加も容易です。幅広い専門分野を包有する日本第四紀学会にとって、オンラインの講演会や講習会などを、いかに多用して学会活動を行うかが、会員サービスを考えれば最も重要な事項であり、今すぐにも対応すべき案件と言えます。学会では、今年度から Zoom のライセンスを購入し、総会もウェビナーのシステムで運営しました。学会全体の活動とともに、各領域の活動も、このオンラインの活動をいかに活かしてゆくかが、学会を活性化させる重要な鍵となるかと思っています。敷居が低く、全国から会員が容易に参加できるオンラインの活動を、各領域の活動の中心の一つに位置付けることが今後の学会活動にとって重要になるかと思っています。このような将来を見据えた学会活動にとって今年度は重要な最初の 1 年間になります。以上のことを念頭に、皆様からの要望を広く受け付けたいと思います。希望するオンラインの講演会、講習会、勉強会、情報交換会、定例の会合を設けることも可能でしょう。執行部会および各領域の代表や幹事に是非ご連絡ください。学会としてもできる限りサポートしてゆきたいと思っています。より魅力的な、会員にとってメリットの大きな学会を目指してゆきましょう。今年度からは、学会の各種情報や手続きに「会員マイページ」を更に活用してゆく予定です。ログインに必要な会員番号は、郵送される第四紀研究や第四紀通信の封筒の表に書かれています。また不明な点は、学会事務局までお尋ね下さい。是非会員マイページに親しんで頂けますようお願いいたします。今年度は、2021-2022 年度の体制を決める選挙も会員マイページを使って実施されます。

今年度の学会活動で皆さんにご報告すべき重要な点がもうひとつあります。「第四紀研究」は、今年まで年間 6 号の発行でしたが、2021 年の 60 巻からは年間 4 号の発行になります。3 月、6 月、9 月、12 月に発行予定です。第四紀通信は、今まで通り隔月の発行になります。「第四紀研究」が年間 4 号から 5 号に増えたのは 1989 年（第 28 巻）で 1989 年度の会員数は 1685 名、年間 5 号から 6 号に増えたのは 1999 年（第 38 巻）で、1999 年度の会員数は 1863 名（過去最大数）でした。現在の会員数は約 1000 人弱となっており、また年間約 40-50 編の論文が第四紀を冠した主要な国際学術誌に日本人が共著者として投稿されています。号数の減にご理解いただけますようお願いいたします。「第四紀研究」の発行は、学

会活動の最も重要な活動の一つです。研究成果の発信の場として、また最新情報や基礎知識の提供の場として重要な役割を担ってきました。原著論文に加えて、幅広い分野を有する第四紀学の啓蒙活動として国際学術誌に掲載された論文の総説や紹介なども歓迎いたします。皆様のご投稿をお待ちしています。

会長 齋藤文紀

## ◆日本第四紀学会 2020 年大会概要

本年度の大会は新型コロナウイルス感染対策のため、オンライン形式（業者と契約）で実施します。たくさんの方のご参加、ご発表をお待ちしています。なお、懇親会は開催しませんので、ご了承ください。9 月末から 10 月上旬に会員メーリングリストとホームページで詳細を連絡します。

### 1. スケジュール

開催日程：2020 年 12 月 26 日（土）～ 27 日（日）

### 2. 参加・発表の登録等

- ・大会に参加、発表するには専用サイトからの登録が必要です。
- ・日本第四紀学会会員以外の方の投稿は、招待または特別セッションに限ります。
- ・講演予稿集を事前にお申込みいただくと、専用サイトからダウンロードできます。
- ・参加登録・投稿サイトは公開準備が整い次第、ご連絡します。

### 3. 大会の主なプログラム

一般研究発表に加え、2019 年学会賞・学術賞受賞記念講演会をオンラインで開催予定です。口頭発表の録画・録音は禁止されます。無許可での画像のダウンロード・キャプチャは禁止されます。ポスターの画像には「電子透かし」を入れます。

【口頭発表】Zoom によるリアルタイムの講演、質疑応答。

12 月 26 日 AM・PM

12 月 27 日 AM・PM

【ポスター発表】事前登録した PDF 形式の画像を掲載します。コメント欄を使って質疑応答が出来ます。

12 月 26・27 日を通じて掲示します。

【2019 年学会賞・学術賞受賞記念講演】

12 月 27 日（日）AM

【若手・学生発表賞】

優れた研究発表を奨励し、研究発表をエンカレッジするために、若手・学生発表賞を設けています。投稿時にエントリーがあった口頭およびポスター発表が対象で、筆頭発表者である 39 歳以下または学生の正会員に授与されます。積極的なエントリーをお待ちしています。

本賞に関する規定・選考基準は学会 HP (<http://quaternary.jp/prize/index.html>) をご覧ください。

### 4. 参加費

大会参加費、講演要旨集の金額は決まり次第ご連絡します。

### 5. 大会実行委員会および行事委員会

大会実行委員長：齋藤文紀（日本第四紀学会会長）

大会実行事務局長：藤原 治（産総研）

実行委員：学会執行部会メンバー、広報委員会ほか

行事委員会：藤原 治（産総研）・池原 実（高知大）・岡田 誠（茨城大）井上 淳（大阪市立大）・目代邦康（東北学院大）・村田昌則（都立大）

## 6. 講演申し込みに関する注意

- ・日本第四紀学会会員以外の方の投稿は、招待または特別セッションに限ります。一般発表を希望される非会員の方は、至急入会手続きをお願いします。日本第四紀学会への入会手続きは、学会 HP「入会・会費の支払いについてのご案内」（<http://quaternary.jp/intro/regist.html>）をご覧ください。
- ・講演方法は「口頭」もしくは「ポスター」を選択して頂きます。登録数によっては大会実行委員会から講演形式の変更をお願いする場合がありますので、あらかじめご了承ください。

## ◆学会賞・学術賞・若手学術賞受賞者選考報告

### (1) 選考経緯

日本第四紀学会の2020年学会賞等の候補者の推薦は2020年1月31日をもって締め切られた。学会賞選考委員会（齋藤文紀委員長、竹村恵二副委員長、小野 昭委員、中村俊夫委員、山崎晴雄委員）は、2020年5月11日にウェブ会議を開催し、推薦があった候補者について2020年日本第四紀学会学術賞、同若手学術賞の選考を行った。選考委員会会合においては、推薦のあった候補者について候補者の資格の確認後、日本第四紀学会顕彰規程と関連する内規に基づき、推薦書、各候補者の業績などを参照して審議を行い、学術賞と若手学術賞の受賞候補者それぞれ1名を決定した。2020年7月9日の2019年度第2回評議員会において、学術賞、若手学術賞の受賞者各1名が決定された。

### (2) 受賞者

#### ●学術賞

受賞者名：北村晃寿会員（静岡大学）

受賞件名：貝化石・有孔虫化石の複合群集解析による日本本島の島嶼化過程および東海地震の履歴の研究  
受賞理由：

北村晃寿会員は、第四系の貝化石と有孔虫化石の複合解析による環境復元から、日本本島の第四紀における島嶼化過程や完新世における東海地震の履歴に関する研究成果を挙げている。

北村会員は、石川県金沢市の下部更新統である大桑層産の貝化石群集と浮遊性有孔虫群集の層位分布の詳細な分析から、両分類群の複合解析により、間氷期ごとに対馬海流が日本海に流入するようになったのは酸素同位体ステージ59（1.7Ma）であること、日本海中層（深度約200m）は1.46～1.30Maの間氷期が第四紀の中で最も温暖であり、その後段階的に寒冷化したこと、その原因は東シナ海沿岸水の影響低下に伴う日本海固有水の生産量増加にあること、さらに3.5～1.7Maには対馬海流が4度流入したことなどの日本本島の島嶼化の過程を明らかにした。これらの成果は東アジアにおける動物群の交流史や植物群の分布の研究に大きく貢献している。

また北村会員は、東日本大震災後、静岡県内の完新世堆積物を用いて古津波・古地震研究を詳細な年代測定に基づき進めてきた。1854年安政東海地震の津波石の発見、御前崎における隆起貝層の発見と1361年正平（康安）地震で駿河トラフが破壊されたこと、西暦400年頃に南海トラフ東部から駿河トラフの破壊で地震が起きたこと、発生頻度は極めて低いものの、発生すれば甚大な被害をもたらす最大クラスの津波であるレベル2津波の痕跡が過去4千年間の地質記録に存在しないことを解明した。これら一連の研究成果は、大規模地震特別措置法の対象である東海地震の実証的研究であり、科学的成果に加えて社会的貢献が大きい。また、「静岡の大規模自然災害の科学」を上梓するなど、第四紀学から地域防災に貢献している。

このように貝化石・有孔虫化石の複合群集解析による日本本島の島嶼化過程および東海地震の履歴における北村会員の業績は、第四紀学と第四紀学会の発展に多大な貢献をしており、日本第四紀学会学術賞にふさわしいと判断する。

<受賞者の言葉> 北村晃寿 .....



このたびは、栄えある日本第四紀学会学術賞を授与していただき、誠にありがとうございます。推薦していただいた方並びに選考委員の皆様へ厚く御礼申し上げます。

受賞対象となった研究成果のうち、日本列島の島嶼化は、石川県金沢市の犀川河床に露出する大桑層の化石記録に基づきます。その化石を観察したのは、金沢大学入学直後の1981年4月で、貝とともにウニの化石が多産することに驚きました。高校生の時に、長野市周辺の第三系で化石を採取していましたが、ウニは数個体しか採取できなかったからです。卒業研究は小西健二教授に師事し、喜界島の現生群体サンゴの骨格の $\delta^{18}\text{O}$ と生息環境の関係を研究しました。本学会のパンフレット「第四紀」の表紙の「群体サンゴの年輪X線写真」は、卒業研究で使ったものです。この研究は、サンゴの $\delta^{18}\text{O}$ からは環境復元できないことが判明していたこともあり、修士研究ではテーマを富山県高岡市周辺の鮮新統の環境解析に変えたものの、地質年代を決定できないため、研究を打ち切りました。

そんな状況にも関わらず、1987年4月、金沢大学の博士課程に進み、研究テーマがないことに気づきました。そこで、それまでの研究を顧みて、氷河性海水準変動に伴う堆積物と生物相の変遷をテーマにすることにしました。金沢大学に在職していた第四紀古海洋学者一小西教授、大村明雄教授、高山俊明教授、加藤道雄教授、大場忠道教授一の影響を受けたのです。

加えて、それまでの経験を踏まえ、研究対象の条件を、露頭の連続性が良く、堆積時代が明らかで、環境指標となる貝化石が多産する第四系としました。それらの条件に前期更新統大桑層は最適でした。露頭が連続しており、1987年には高山・加藤教授らが微化石層序で年代を解明され、鮎野義夫教授と松浦信臣博士の採取した貝化石標本が金沢大学にあったのです。その上、1987年4月に助手で着任された神谷隆宏博士から紹介いただいた近藤康生博士には、研究方法をご教示いただきました。

調査に際しては、氷河性海水準変動は堆積物と生物相に周期的変動をもたらすので、堆積相・貝化石群集に周期的変遷が残されているという作業仮説を立て、調査開始からすぐにそれらを発見し、その後、貝化石の定量的層位データを収集しました。それらの結果から、大桑層は酸素同位体ステージ(MIS) 56~20(1.65~0.80Ma)に対比される19の堆積シーケンスの累重からなり、シーケンス内で寒暖両水系貝化石種が周期的に変遷することを解明して、博士号を取得しました。その後、ポスドクで京都大学の鎮西清高教授から研究デザインの設計方法などをご教示いただきました。静岡大学着任後は北里洋教授から浮遊性有孔虫の種同定をご教示いただき、その層位データを追加し、間氷期ごとに対馬海流が日本海に流入するようになった、すなわち日本本島の本格的な島嶼化はMIS59(1.7Ma)であることを突き止めたのです。

受賞対象となった研究成果のうち、東海地震の履歴に関しては、2011年3月11日の東北地方太平洋沖地震とそれに伴う巨大津波による激甚災害の発生とその後の南海トラフ巨大地震の想定見直しを機に始めた伊豆半島・静岡・焼津周辺の沿岸低地における津波堆積物調査に基づきます。社会的関心が高いため、緊張感を持って慎重に研究を進めており、産業技術総合研究所の藤原治博士、東京大学大気海洋研究所の横山祐典教授や宮入陽介博士、ふじのくに地球環境史ミュージアムの山田和芳教授と菅原大助教授に多大な協力をいただいております。研究成果も着実に上がっており、引き続き研究を進めてまいります。

最後に、故池谷仙之教授を初めご指導いただいた方々、関係者の皆様、研究室の卒業生・学生、そして、研究生活を支えてくれた妻と息子に感謝申し上げます。

●若手学術賞

受賞者名：平林頌子会員（立正大学）

受賞論文1：Shoko Hirabayashi, Yusuke Yokoyama, Atsushi Suzuki, Tezer Esat, Yosuke Miyairi, Takahiro Aze, Fernando Siringan, Yasuo Maeda (2019a), Local marine reservoir

age variability at Luzon Strait in the South China Sea during the Holocene, *Nuclear Instruments and Methods in Physics Research Section B: Beam Interactions with Materials and Atoms* 455, 171-177. doi:10.1016/j.nimb.2018.12.001

受賞論文 2 : **Shoko Hirabayashi, Yusuke Yokoyama, Atsushi Suzuki, Yosuke Miyairi, Takahiro Aze, Fernando Siringan, Yasuo Maeda (2019b), Insight into Western Pacific Circulation from South China Sea Coral Skeletal Radiocarbon, *Radiocarbon*, 61(6), 1923-1937. doi:10.1017/RDC.2019.145**

**受賞理由 :**

平林頌子会員は、放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) を使って第四紀の多様な研究課題に取り組んでいる。今回の受賞対象である 2 本の論文は、海洋試料について測定された  $^{14}\text{C}$  年代を正確な暦年代に較正するために不可欠なローカル海洋リザーバ年代 ( $\Delta R$  値) を北西太平洋において高精度で求めた研究 (受賞論文 1) と、 $^{14}\text{C}$  を高時間分解能のトレーサーとして使うことで黒潮の流路変化を明らかにし、気候変動との対比などを行った研究 (受賞論文 2) である。

受賞論文 1 は東アジアモンスーンの水蒸気供給海域である南シナ海の化石サンゴを用いた研究である。化石サンゴの優位性は、年輪に沿って詳細な  $^{14}\text{C}$  分析が可能であることと  $^{14}\text{C}$  分析したサンゴ自体の形成年代がウラン系列年代測定により得られる点である。平林会員は両年代測定を自ら行い、 $\Delta R$  値を高精度に求めると共に、エルニーニョやモンスーンといった気候変動の影響により、 $\Delta R$  値が 300 年以上も変動を起こしていた可能性を初めて指摘した。

受賞論文 2 は 20 世紀半ばに行われた大気圏内核実験起源の  $^{14}\text{C}$  を用いて、北西太平洋黒潮域の海洋水循環を詳細に検討した論文である。既存の大気圏内核実験起源の  $^{14}\text{C}$  を使った研究では、測定精度が悪く時間解像度も粗かったため、海洋水循環の詳細が不明瞭であった。平林会員はそれらを克服するために、X 線撮像とサンゴの生息時水温を記録しているとされる微量金属元素 (Sr/Ca) を細かく分析することで詳細な年代モデルを確立し、さらに微量試料の  $^{14}\text{C}$  分析により、フィリピン・ルソン島北部海域における一年解像度のデータを獲得した。このように、自らが開発し 2017 年に *Geochemistry, Geophysics, Geosystems* 誌に公表した手法を適用することで、広域にわたる黒潮の流路変化を導きだし、これらの諸データが、南シナ海への黒潮侵入量と湧昇水量に基づく水塊変動によって説明できることを示した。

これらの論文は第四紀学の発展に貢献する優れた学術成果と認められることから、平林会員を若手学術賞にふさわしいと判断する。

**<受賞者の言葉> 平林頌子 .....**



この度は、第四紀学会若手学術賞という栄誉ある賞をいただき、誠にありがとうございました。本当に嬉しく思うと同時に、身の引き締まる思いでおります。研究者として経験の浅い私がこのような賞をいただいたことは、多くの先生・先輩・同僚の研究者の皆様から多大なご指導・ご支援をいただいた賜物と、深く感謝しております。東京大学大気海洋研究所の横山祐典教授には、第四紀学・古気候学の魅力を教えていただきました。そして、研究者への道へと誘っていただき、指導教官として、研究全般にわたって暖かくご指導をいただきました。放射性炭素年代測定に関して、加速器質量分析装置の立ち上げから分析・解析までご指導・多大なご協力をいただいた東京大学大気海洋研究所の宮入陽介博士、阿瀬貴博博士、U/Th 年代

測定の実験技術を一から根気よくご指導いただいたオーストラリア国立大学の Tezer Esat 博士を始め、全ての共同研究者と関係者の皆様に、この場をお借りして深く感謝いたします。

今回評価していただいた論文は、サンゴ骨格中に含まれる放射性炭素の高時間分解能分析による黒潮変動復元に関するものです。このサンゴ骨格による黒潮変動復元が行えるようになるまでには、2013 年に東京大学大気海洋研究所に日本で初めて導入されたシングルステージ型加速器質量分析装置の立ち上げから取り組みをはじめ、放射性炭素年代測定に必要な試料の微小化のための化学前処理法の開発や、微量試料を測定するための最適な加速器質量分析装置の測定条件の検討が必要でした。その技術開発にも長い時間がかかり、結果的には修士 1 年の冬から博士課程 3 年まで、約 4 年を費やすことになりました。学生時代およびポスドク時代には、オーストラリア国立大学地球科学研究所にも合計 1 年以上滞在させていただき、Tezer Esat 博士の指導の下で、U/Th 年代測定の実験技術習得にも励んでまいりました。今回評価していただ

いた2本の論文は、このような根気のいる技術開発、技術習得の基に発表することができた研究成果ですので、大変光栄な賞の受賞という形で評価をいただいたことを、大変嬉しく思います。

今回評価していただいた2本の論文は、どちらも第四紀研究において重要である放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) を使った研究になりますが、前述の高時間分解能  $^{14}\text{C}$  分析の開発により、既往研究と異なるレベルのトレーサーとして使うことで黒潮の変化を明らかにし、気候変動との対比を行った研究となります。この研究により、海洋試料を用いた  $^{14}\text{C}$  年代測定を精度よく行うために重要なローカルリザーバ年代 ( $\Delta R$ ) がエルニーニョやモンスーンといった気候変動の影響で300年以上も変動を起こしていたこと、20世紀前半に行われた大気圏内核実験起源の  $^{14}\text{C}$  を用いて、北西太平洋の黒潮域の循環を詳細に明らかにし、国際雑誌に研究成果を発表することができました。

今回の受賞を励みとし、第四紀学の発展に貢献できる成果をあげられるよう、より一層努力して参りますので、今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

## ◆ 論文賞・奨励賞受賞論文・受賞者選考報告

### (1) 選考経緯

2020年日本第四紀学会論文賞ならびに日本第四紀学会奨励賞の会員からの推薦は、第四紀通信第26巻6号(2019年12月)で募集され、2020年1月31日に締め切られた結果、論文賞・奨励賞に対して会員からの推薦はなかった。2019年度論文賞選考委員会(池原 研委員長、紀藤典夫委員、黒木貴一委員、穴倉正展委員、長橋良隆委員)では委員長を委員互選の上決定し、選考日程と進め方の確認を行った上で、各賞の候補論文の選考が進められた。本年度の該当論文は2018年、2019年の第四紀研究に発表された会員を含む論文47編であり、このうち奨励賞対象論文は2編であった。これらのすべての候補論文を対象に選考が行われた。その結果、委員全員の評価が得られた論文賞候補2編の推薦と、奨励賞の該当なしが決定された。2020年7月9日の2019年度第2回評議員会において、論文賞受賞論文2編と受賞者が決定された。

### (2) 受賞論文・受賞者

#### ● 論文賞

受賞者名：後藤憲央会員

受賞論文：論説 後藤憲央・佐々木俊法(2019)河成段丘面の比高分布から推定される伏在断層の活動性—2008年岩手・宮城内陸地震震源域直上の磐井川を例に—。第四紀研究 58巻5号, 315–331頁。

#### 受賞理由：

近年国内で起きた内陸直下を震源とする被害地震は、事前に活断層が想定されていなかった場所で起きたケースが多く、従来の明確なせん断変形による変動地形を前提とした活断層評価だけでは問題があった。本論文はそのケースの1つである2008年岩手・宮城内陸地震(M7.2)について、震源域直上を流れる磐井川の河成段丘面の比高分布を用いることで、地下の伏在断層の評価を行い、新たな指標に関する提案を行っている。

本論文の優れた点は、河成段丘の地形面区分やテフラ層序に基づいて編年を行うという、基本的に忠実なアプローチを確実に行った上で、さらに航空レーザー測量結果などによる高精度の高度データを用いることで、段丘面の高度分布を正確に捉えただけでなく、2008年の地震に伴う地殻上下変動を $10^1\text{ m}$ オーダーで広域に抽出したところである。これにより地下の伏在断層の影響範囲を明確にし、さらに地震時の地殻変形と段丘面の比高分布から推定される第四紀中～後期における10万年スケールの地殻変形、基盤の新第三系の地質構造とを対比させることで、長期的に断層変位が累積していることを明らかにした。この結果、平均活動間隔を5900～7600年と評価することに成功している。

このように従来は評価が難しかった広域変形を伴う伏在断層に対し、本論文が示した手法は非常に有効であり、第四紀学における学術上の進展だけではなく、防災・減災対策の観点からも重要な成果と言えます、日本第四紀学会論文賞に値するものである。

＜受賞者の言葉＞ 後藤憲央 .....



このたびは、論文賞をいただけたことを大変光栄に思います。ありがとうございます。このような賞をいただけるなど、まったく思いもよらず突然の連絡に大変驚きました。当初の完成度が低かった原稿を受理されるまでに仕上げることができ、さらにこのような賞を頂けたのは、査読者と編集委員の方々のご助力のおかげであると思っています。この場でお礼を申し上げます。

この論文では、磐井川に発達する河成段丘面の比高分布が地震時の地殻変動の累積によるものだけであることを実証的に説明し、そこから伏在断層の活動性が推定できることを示しました。手法は、変位基準地形をもとに地殻変動を復元するという、一般的なものです。このような手法が用いら

れる場合、変位基準とする地形の編年・対比に関してのみならず、その成因や性状の地形発達についての検討を十分に行ったうえで議論を進めなければならないのではないかと以前からの思いがありました。今回の場合のように、ある程度定量的に断層の活動性を議論しようとする、より確かな地形面の編年・対比と、変位基準地形の選択が妥当であることの説明が必要となりました。これらについて、十分な説明ができたとは言い難いですが、河成段丘の地形発達過程から、ある程度の妥当性を示すことができたのではないかと考えています。また、河成段丘の比高から隆起量を推定するという手法は、気候変動に応じた河床高度の規則的な変動によって段丘が形成されるというモデルに基づいています。本研究では、この手法の妥当性ととも、地形発達過程を考慮した改良点を示すことができたと考えています。

地形を使って伏在断層をどのように評価するかといった問題は、従来から議論されていたと思います。今回の場合、地震が発生し、その後に様々な報告による資料があったことで、磐井川の河成段丘の比高分布の解釈が可能となりました。一方で、地震が発生する前に具体的な地震像を提示することは、防災・減災の観点から重要です。その場合に、変位基準地形の成因についての注意深い検討がなされた上で、他の資料とともに震源断層の実在性が示されることが重要であるということに再認識できた研究でもありました。

最後になりましたが、執筆の機会を与えていただいた電力共通研究関係者の方々と、論文の構成や内容について議論いただいた共著者の電力中央研究所の佐々木俊法博士にお礼申し上げます。

●論文賞

受賞者名：佐々木 華会員・石原与四郎会員

受賞論文：論説 佐々木 華・大西由梨・石原与四郎 (2019) 更新統塩原層群宮島層における湖成年縞堆積物に挟在するイベント堆積物の特徴とその識別方法—側方変化を考慮した堆積過程の検討一. 第四紀研究 58 巻 2 号, 237–249 頁.

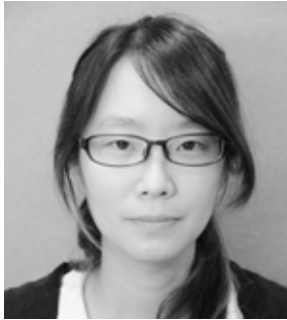
受賞理由：

本論文では、中期更新世の古塩原湖の湖成層である塩原層群宮島層について、ミリメートルオーダーの詳細な露頭観察に基づき、1177 年分の通常時に堆積した年縞堆積物とそこに挟在する 634 層の洪水時などに堆積したイベント堆積物の特徴を記載した。そして、イベント層の層相や層厚の側方変化や下位層の侵食状況や内部堆積構造などからイベント層の堆積過程を明らかにするとともに、年縞堆積物・イベント堆積物双方の層序変化から気候変化や水位変化の影響の可能性を指摘している。さらに、著者らの先行研究の結果とも比較することで、洪水性イベント堆積物と斜面崩壊性イベント堆積物の識別方法や、さらには洪水性イベント堆積物の輸送モードの違いの識別方法も提案している。これらは現世湖沼のボーリングコアでは困難な数百 m の露頭を連続的に観察するという地質学の最も基本的な調査から行われている。露頭観察という極めて基本的な手法からここまで議論できるかと思えるほどの結果であるが、本論文で示された図と写真ならびにそれらを用いた説明は明解である。

これらの成果は、日本国内や海外で精力的に行われている湖沼堆積物を用いた災害履歴研究について、洪水履歴のみならず、地震履歴の解明にも貢献するものと考えられる。さらに本論文の結果は、通常時の年縞堆積物に記録されているであろう古気候情報と洪水情報を統合することで、洪水などの気象災害が気候条件にどのように影響されているかを知ることによって期待されると期待される。このように、本論文は堆積学を超えて第四紀学の発展に大きく寄与すると期待されることから、本学会の論文賞にふさわしいと判断する。



＜受賞者の言葉＞ 佐々木 華 .....



この度は荣誉ある「日本第四紀学会論文賞」を賜り、大変嬉しく、光栄に感じております。本論文を推薦していただいた方、評価していただいた選考委員の方々、本論文にあった多くの不備を指摘していただいた査読者・編集委員の方々、関連する共同研究者の方々をはじめ学会関係者の皆様にはこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。本研究では、栃木県的那須塩原に分布する塩原層群宮島層に見られる年縞堆積物とイベントによって形成された堆積物の特徴の記載を行いました。そしてイベント堆積物の層相とその側方変化から堆積過程を明らかにし、年縞堆積物が持つ古環境情報と対比することで気候変化の影響の可能性を探っています。

最近、現世の湖のボーリングコアによる調査によって年縞堆積物に含まれるイベント堆積物から洪水記録や地震記録を得る研究が多く行われるようになってきています。ボーリングコア試料に観察される厚い碎屑性イベント堆積物と河川流量の記録を比較した研究では、そのイベント堆積物のすべてが洪水起源ではなく地すべりなど他のプロセスに起因するイベント堆積物も含まれており、単純に厚い碎屑性イベント堆積物を洪水のプロキシとして扱ってはならないと結論づけています。これらのイベント堆積物から古環境情報を得るためには、その起源の認定基準を明らかにしなければなりません。本研究では、宮島層のイベント堆積物の層相を記載しています。そして岡山県真庭市の蒜山原高原に分布する、更新統の湖成層である蒜山原層の年縞堆積物に含まれるイベント堆積物と比較を行うことで、それらの堆積過程を検討しました。洪水性堆積物の詳細な層相の違いからは、その運搬・堆積過程が読み取れる可能性を示しました。本研究で検討を行ったイベント堆積物の層相の識別基準が他の湖成層にも適用できるようなものであれば、地層からもイベントの種類を識別できるようになり、洪水や地震の災害記録の復元を可能にします。また、現世の湖成堆積物においても現在の洪水や地震などの災害記録と対比をより詳細に行うことが可能になることが期待されると思います。本研究では、年縞堆積物が持つ古環境情報とイベント堆積物の規模や頻度などを対比することによって湖水周辺の環境（気候）変化の影響の可能性も探っています。もしこのようなことが可能であれば、イベントがどのような気候条件に影響されるかを解明する手がかりとなるでしょう。

今回受賞を頂いた論文は第四紀研究の特集号「第四紀研究から防災・減災への多角的アプローチ」に掲載されています。この特集号は防災・減災に関連した幅広い分野の論文が収められており、本論文は防災・減災へのアプローチとしてイベント堆積物の研究を投稿させていただきました。お声がけくださった特集号委員長の奥野 充先生には深く御礼を申し上げます。今回の受賞を励みに、更に学会と社会に貢献できるよう研究に取り組んでいきたいと思っております。最後に、本論文の投稿にあたり指導をくださった石原与四郎先生、共著者の大西由梨さんをはじめ、御助力を頂いた方々に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

## ◆功労賞受賞者選考報告

### (1) 選考経緯

名誉会員候補者選考委員会（奥村晃史委員長、岡崎浩子委員、公文富士夫委員、百原 新委員、米田 穰委員）によって、各委員からの候補者・推薦理由の提案、委員会としての推薦・報告書のとりまとめが行われた。第四紀学について多大な貢献のあった者については、「千葉セクション」GSSPの実現という大きな成果を今年達成したことが、近年の日本の第四紀学について最大の貢献であることに議論の余地は全くなく、Chiba composite section research communityを候補者とした。日本第四紀学会に関係した活動に貢献のあった者については、従来の受賞事例を参考として、選考時点で満年齢70歳、会員歴20年以上を条件とした。また、評議員や各種委員を長年務めて学会への貢献が顕著と認められることを事務局作成の資料で判断した。そして、委員全員の賛成が得られた候補者を最終的に決定した。2020年7月9日の2019年度第2回評議員会において、1団体および2会員が功労賞受賞者として決定された。

(2) 受賞者

**第四紀学について多大な貢献があった者**

**受賞団体名：Chiba composite section research community\***

**受賞理由：**

2020年1月IUGSは「千葉セクション」を下部・中部更新統境界のGSSPとして承認した。Chiba composite section research communityは、長年にわたる日本の第四紀研究の蓄積の上にならって、この境界に関する多様な地質情報を高精度でかつ多量に取得して国際学会に積極的に公表するとともに、過去5年あまりの期間に精力的にGSSP認定の申請に取り組んで日本で初めてのGSSP認定を実現させた。その過程で数多くの日本の研究者の多大な業績をまとめあげて、日本の第四紀研究の成果を世界に発信した功績は非常に大きく功労賞の受賞にふさわしい。

\* 構成メンバー（ABC順、敬称略）

羽田裕貴（産業技術総合研究所地質調査総合センター）、林 広樹（島根大学大学院総合理工学研究科）、本郷美佐緒（有限会社アルプス調査所）、堀江憲路（国立極地研究所）、兵頭政幸（神戸大学内海域環境教育研究センター名誉教授）、五十嵐厚夫（復建調査設計株式会社）、入月俊明（島根大学大学院総合理工学研究科）、石塚 治（産業技術総合研究所地質調査総合センター）、板木拓也（産業技術総合研究所地質調査総合センター）、泉 賢太郎（千葉大学教育学部）、亀尾浩司（千葉大学大学院理学研究院）、川又基人（総合研究大学院大学極域科学専攻）、川村賢二（国立極地研究所）、木村純一（海洋研究開発機構）、小島隆宏（千葉県環境研究センター）、久保田好美（国立科学博物館）、中里裕臣（農業・食品産業技術総合研究機構農村工学研究部門）、西田尚央（東京学芸大学環境科学分野）、岡田 誠（茨城大学理学部）、荻津 達（千葉県環境研究センター）、奥田昌明（千葉県立中央博物館）、奥野淳一（国立極地研究所）、里口保文（滋賀県立琵琶湖博物館）、仙田量子（九州大学大学院比較社会文化研究院）、紫谷 築（清真学園高等学校・中学校）、Quentin Simon（Centre Européen de Recherche et d'Enseignement en Géosciences de l' Environnement (CEREGE-UM34)）、末吉哲雄（国立極地研究所）、菅沼悠介（国立極地研究所）、菅谷真奈美（技研コンサル株式会社）、竹下欣宏（信州大学教育学部）、竹原真美（国立極地研究所）、渡邊正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）、八武崎寿史（千葉県環境研究センター）、吉田 剛（千葉県環境研究センター）

**日本第四紀学会に関係した活動に貢献のあった者（五十音順）**

**受賞者名：井内美郎会員 小野有五会員**

**受賞理由：**

日本第四紀学会の評議員や各種委員などを長年務め、学会活動への寄与と学術的な貢献が大きく、功労賞にふさわしい。

**◆初めての試みーオンラインによる総会・表彰式：オンライン担当の感想**

高橋尚志、久保田好美、村田昌則

2020年8月29日（土）、日本第四紀学会2020年度第1回総会・表彰式を、web会議システムZoomを用いたオンライン会議にて開催した。例年では総会・表彰式は、8月頃に開催される大会期間中に実施しているが、今年度はCOVID-19の感染拡大防止のため大会は延期となり、総会・表彰式のみオンラインでの開催となった。オンラインでの総会は、第四紀学会としては初めての試みであったが、それでも51名の会員に参加頂き、オンライン担当（各委員会のオンライン担当者）としても緊張感をもって臨んだ。

今回は事前の参加登録から従来のようなメール送信ではなく、グーグルフォームを活用してウェブ上のURLからサイトにアクセスし、参加登録と委任状の提出を行うという方式を試みた。登録情報がクラウド上に保存されるため、セキュリティをどの程度にするべきかについて不明な点も多かったことから、会員マイページでの周知を行うことにした。しかし、そもそも会員マイページに入るための会員番号がわか

らない会員が多かったため、グーグルフォームの URL を会員メーリングリストで周知し、最終的に 205 名の回答があった。集計がオンライン上で完結するという点や、運営側の担当グループがリアルタイムで回答の状況を把握・共有できるという点で、運営側の負担を減らすことができた。コメントでも、「簡単に登録できた」といった好意的な意見が寄せられた。一方で、登録開始直後は、グーグルフォーム上での誘導ミスや回答の選択肢の制限などがあり、不便だというコメントもいただき、その都度改善した。これらのノウハウも今後のために蓄積していきたい。

総会は参加者数が増えることが予想されたため、Zoom ビデオウェビナーにて実施した。ウェビナーでは、一般の参加者（視聴者）は原則マイクやカメラを ON にすることができないなど、権限が制限されており、ミーティングと異なる点がある。そのため、総会開始時にオンライン担当からウェビナーの使い方について説明した。また、別途チャットルームを用意し、機能や接続トラブル等に対応した。今後も、大会や総会、講演会などを Zoom ウェビナーにて開催する機会が多くなると思われるが、オンライン会議・大会のルールやシステムについて、引き続き十分に周知することが必要であろう。

事前の打ち合わせは、当日の司会進行役や発言者を含めて 2 回、それとは別に、一般向けの Zoom の接続テストを 1 回行った。Zoom 上で、参加者の発言を許可するなどといったさまざまな権限がある「ホスト」あるいは「共同ホスト」は、オンライン担当 3 名と議長 1 名の 4 名で担った。また、当日の司会者など発言者については、「パネリスト」として登録した。

総会の進行自体は、大きな滞りはなく進められた。審議は Zoom の投票機能を用いて実施したが、投票結果の共有が最初はうまくいかず、一般の参加者は直接確認できなかったため、議長が投票結果を読み上げることで対応した。2 つ目の審議事項からは、ほぼすべての参加者が 1 分以内に投票を終え、結果の共有もスムーズにできた。本来、対面での総会の審議では、挙手・拍手によって承認を得るため、なるべくこれに近い形式をとれるよう検討していきたい。

一方、インターネットブラウザから Zoom ウェビナーにアクセスしている場合は投票機能が制限されるのではないかと指摘や、複数人が短時間で会話をするような状況では画面が見にくいといった指摘が、チャットや Q&A 上に寄せられた。これらに対応するべく、途中からホストの一人が視聴者として Zoom にサインインし、視聴者側の機能制限や画面の写り方を確認することにした。事前に想定されるトラブルを洗い出していたとは言え、ホスト側のミスで、画面の切り替えがうまくいかなかったといった反省点もあった。また、参加者からのコメントとして、「Zoom ミーティングだと思って参加したが、ウェビナーだったので、機能制限があり戸惑った」「ウェビナーという事前の説明が欲しかった」「ウェビナーに視聴者として一度参加してしまうと、自分の Zoom 上での名前が確認できない」といった Zoom の使い方に対する意見があった。ウェビナーについてもっと周知をすべきであったと反省した。

総会に引き続いて、学会賞・学術賞受賞者の表彰式も執り行った（本号表紙参照）。Zoom の仕様上、同時に音声を発信できる人数は限られているため、授与の際の拍手はいささか寂しいものとなってしまった。Zoom 上での拍手については、執行部会とオンライン担当で事前に試してみているものの、良い解決策は見つからなかった。また、「視聴者」では、自分でミュート機能を解除できないので、その点も伝え方を含めて混乱があったものと思われる。拍手について良い手段があれば、会員の皆様からアイデアを伺いたい。

今回のオンラインでの総会・表彰式の開催を通しての感想として、開催地から遠い地域に在住する会員も気軽に参加できるという、オンライン会議の良い側面を実感した。多少のトラブルはあったとは言え、総会後のブラウザ上のアンケートには、今回の総会について「満足した」や「やや満足した」との回答を多く頂き、嬉しく思っている。委任状を提出した会員の中にも、「参加できないが、紙面や動画で報告を楽しみにしている」というコメントも頂いており、不参加だったが様子を知りたいという会員には動画を閲覧できるような仕組みも前向きに考えていきたい。

もちろん、依然として対面でのやり取りの重要性は高いが、オンライン会議では、地方在住の会員の学会への参加のハードルが低くなり、遠く離れた会員間での交流や意見交換もより活発になることが期待される。今後、仮に COVID-19 の流行が収束し、対面での開催を再開した後も、オンライン会議システムを一つの学会参加の手段として併用できればよいと思われる。そのためにも、今後も経験を重ねながら、学会としてのオンライン会議の運営方法やルールを精錬・熟成し、オンライン会議ツールを浸透させていければと思う。第四紀学会としてオンライン会議を重ねていく上では、今後も予期せぬトラブルや問題点が生じる可能性もあるが、オンライン担当としてはできる限り準備して対応したい。会員のみなさまには、引き続きご理解・ご協力をお願いしたい。

## ◆日本第四紀学会 2021年大会案内(第1報)

2021年大会は以下の概要にて開催の予定です。  
但し会場予約などの事情で日程変更の可能性もあります。

日程：2021年8月27日(金)～30日(月)  
一般発表・総会 8月27日(金)～28日(土)  
シンポジウム 8月29日(日)  
巡検 8月30日(月)

会場：大阪市立大学・大阪市立自然史博物館  
大会実行委員長：三田村宗樹(大阪市立大学)  
実行委員：井上 淳(大阪市立大学)、中条武司(大阪市立自然史博物館)  
石井陽子(大阪市立自然史博物館)

## ◆日本第四紀学会 2019年度第2回評議員会議事録

日時：2020年7月9日(木) 10:00～11:30  
方法：Zoom システムを使ったオンライン会議

出席者：齋藤文紀(会長)、鈴木毅彦(副会長)、  
高原 光(副会長)、以下評議員：兵頭政  
幸(議長)、池原 実、池原 研、川幡穂高、  
中川 毅、横山祐典、奥村晃史、片岡香  
子、荻谷愛彦、穴倉正展、丹羽雄一、藤  
原 治、堀 和明、三浦英樹、青木かおり、  
卜部厚志、里口保文、長橋良隆、水野清秀、  
出穂雅実、海部陽介、北村晃寿、工藤雄  
一郎、近藤 恵、齋藤めぐみ、那須浩郎、  
百原 新、植木岳雪、小荒井 衛、目代  
邦康、山田和芳、米澤正弘(以上35名)

委任状：4通(議長委任)

オブザーバ：久保田好美(庶務委員会)

藤原 治行事委員長の開会の辞、鈴木毅彦副  
会長によるZoomの使用法の説明、さらに齋藤文紀  
会長の挨拶に続き、定足数の確認が行われ、兵頭  
政幸議長により以下の議事が進行された。

### (1) 2020年日本第四紀学会学術賞・若手学術賞受 賞者の決定

学会賞選考委員会(齋藤文紀委員長、竹村恵二  
副委員長、小野 昭委員、中村俊夫委員、山崎晴  
雄委員)は、推薦があった候補者について選考を  
行い、学術賞と若手学術賞の受賞候補者それぞれ  
1名を決定した。齋藤選考委員長から経過や推薦

理由の説明を受けたのち、審議を行い、下記の受  
賞者が確定した(受賞理由などの詳細は本号の学  
会賞・学術賞・若手学術賞受賞者選考報告参照)。

- ・2020年日本第四紀学会学術賞 北村晃寿会員
- ・2020年日本第四紀学会若手学術賞 平林頌子会員

### (2) 2020年日本第四紀学会論文賞受賞論文の決定

論文賞選考委員会(池原 研委員長、紀藤典夫  
委員、黒木貴一委員、穴倉正展委員、長橋良隆委  
員)では、2018年、2019年の第四紀研究に発表  
された会員を含む論文47編(このうち奨励賞対  
象論文は2編)を対象に選考が行われ、論文賞候  
補2編の推薦と、奨励賞の該当なしが決定された。  
池原選考委員長から経過や推薦理由の説明を受け  
た後、審議を行い、下記受賞論文、受賞者が確定  
した(受賞理由などの詳細は本号の論文賞・奨励  
賞受賞論文・受賞者選考報告参照)。

- ・2020年日本第四紀学会論文賞1

後藤憲央・佐々木俊法

河成段丘面の比高分布から推定される伏在断層  
の活動性—2008年岩手・宮城内陸地震震源域直  
上の磐井川を例に一、第四紀研究 第58巻第5  
号、315–331ページ、2019年。

受賞者名：後藤憲央

- ・2020年日本第四紀学会論文賞2

佐々木 華・大西由梨・石原与四郎

更新統塩原層群宮島層における湖成年縞堆積物  
に挟在するイベント堆積物の特徴とその識別方  
法—側方変化を考慮した堆積過程の検討— 第

四紀研究 第58巻第2号, 237-249 ページ, 2019年.

受賞者名: 佐々木 華・石原与四郎

なお、論文賞選考委員会から執行部会に対して論文賞選考に関する検討事項が示されており、推薦募集の周知、選考のスケジュールや手順などをまとめたマニュアルの作成、規程と内規間での表現の調整、論文賞受賞対象者の再検討などを行うことにした。

### (3) 論文賞・奨励賞選考に関する内規の改訂

顕彰規程では、論文賞は会員である著者に授与するとあるが、論文賞・奨励賞選考に関する内規では、執筆者一同に授与となっている。混乱を生じる表現があるため、上位規約である顕彰規程にあわせて、論文賞・奨励賞選考に関する内規を下記のように変更する案が執行部会より提案され、審議の結果、承認された（改正規約の全文は学会 HP の本学会の紹介→会則・規程の該当する規約を参照）。

(現行)

4. 論文賞受賞論文が複数の著者（研究グループ等を含む）により執筆されたものである場合には、執筆者一同に論文賞を授与する。奨励賞については会員である筆頭著者に授与する。

15.・・・また、学会賞選考委員長は、評議員会と総会において、選考経過と結果を報告する。

(改訂案)

4. 論文賞受賞論文が複数の著者（研究グループ等を含む）により執筆されたものである場合には、会員の執筆者一同に論文賞を授与する。奨励賞については会員である筆頭著者に授与する。

15.・・・また、論文賞選考委員長は、評議員会と総会において、選考経過と結果を報告する。

### (4) 2020 年日本第四紀学会名誉会員候補者の選出

名誉会員の選出は原則 2 年ごとに検討することになっていて、名誉会員候補者選考委員会（奥村晃史委員長、岡崎浩子委員、公文富士夫委員、百原 新委員、米田 穰委員）によって委員全員の賛成が得られた 3 名の会員が推薦された。奥村選考委員長から経過、推薦理由などの説明を受けた後、推薦があった下記 3 名の会員を名誉会員の最終候補者とするの審議を行い、承認された。

2020 年日本第四紀学会名誉会員候補者

岩田修二会員、海津正倫会員、吉川周作会員  
(3 名の会員はその後 2020 年度総会において名誉会員として承認された。推薦理由などの詳細は、次号の第四紀通信に掲載予定。)

### (5) 2020 年日本第四紀学会功労賞受賞者の決定

功労賞の授与は原則 2 年ごとに行うことになっていて、名誉会員候補者選考委員会によって検討された。奥村選考委員長から経過、推薦理由などの説明を受けた後、推薦のあった下記 1 団体及び 2 会員を 2020 年日本第四紀学会功労賞受賞者とするの審議を行い、承認された（詳細は本号の功労賞受賞者選考報告参照）。

・第四紀学について多大な貢献のあった者

功労賞受賞団体名: Chiba composite section research community

・日本第四紀学会に関係した活動に貢献のあった者  
功労賞受賞者名: 井内美郎会員、小野有五会員

### (6) 名誉会員候補者選考規程の改訂

名誉会員候補者選考規程では、名誉会員候補者の条件の一つである年齢 70 歳以上、会員歴 20 年以上がいつの時点かが明確にされていない。そのため執行部会から以下のような改訂案が示され、審議の結果、承認された（改正規約の全文は学会 HP の本学会の紹介→会則・規程の該当する規約を参照）。

(現行)

第 5 条 ……なお、そのほかの名誉会員候補者の条件として、(1) 年齢 70 歳以上、(2) 本会会員歴 20 年以上、を満たしていることとする。

(改訂案)

第 5 条 ……なお、そのほかの名誉会員候補者の条件として、選考が行われる当該年の 4 月 1 日時点で(1) 年齢 70 歳以上、(2) 本会会員歴継続 20 年以上、を満たしていることとする。

### (7) 2020 年度総会の方法についての提案

2020 年度総会は、新型コロナウイルス感染症リスクを避けるため、新年度早々にオンライン会議とし、2019 年度事業報告・会計報告と 2020 年度事業計画・予算案を中心に行う案が執行部会から提案された。2020 年度第 1 回評議員会についても、その前日にオンライン会議とする提案が行われた。以下の案について、審議の結果、承認された。

2020 年度第 1 回総会

日時: 2020 年 8 月 29 日 (土) 14:00 ~ 16:00 (表彰式を含む)

方法: Zoom システムを用いたオンライン会議

案内方法:

通信記事にオンラインにて総会を行うことを伝える。総会参加者は事前登録とし、参加できない会員は委任状の提出を求めることを記す。参加・委任状提出などは、グーグルフォームを用い、第四紀学会ホームページトップページにある「会

員マイページ」内からリンクを張って web 上で申し込みができるようにする。

参加・委任状登録：

「会員マイページ」内にリンクを張ったサイトから参加登録をする。参加しない場合は、委任状提出欄へ進むことになる。

オンライン会議の連絡方法：

参加登録した会員に限定した参加者 ML を作り、会議の日時、URL、ID、パスワードなどを連絡する。会議接続テストを事前に 1 回行い、その日時や URL も連絡する。

Zoom のアカウント・担当者：

第四紀学会独自にライセンスを取得する。庶務委員会・行事委員会委員を中心にオンライン担当者を決め、独自のメールアドレスをつくってアカウント登録する。また、Zoom の使い方の簡単なマニュアルを担当者が作っておく。

表彰式：総会后、オンラインで表彰式を行う。庶務委員会が受賞者にあらかじめ知らせておく。

評議員会：総会の前日の 8 月 28 日（金）14:00～16:00 にオンライン会議を行う。

評議員会の参加登録・委任状提出も web 上で行う。

総会議題：

- ① 2019 年度事業報告、② 2019 年度会計報告・会計監査報告、③ 2020 年度事業計画案、④ 2020 年度予算案、⑤ 第四紀研究年間号数削減案、⑥ 会員名簿廃止・会員限定ページで閲覧可にする案、⑦ 名誉会員の承認、⑧ そのほか

総会資料：

8 月 25 日までに公開する予定。会計監査が 8 月 20 日ころになりそうなので、場合によっては会計報告・監査報告を別にする。「会員マイページ」内を予定。PDF をダウンロードできるようにする。

## (8) 2020 年大会についての提案

大会についての下記執行部会の方針について、審議を行い、承認された。

大会の開催方法について執行部会で議論を重ねた結果、対面参集しての大会開催は現状では無理と判断したので、オンラインのみでの開催を基本方針としたい。オンラインの場合には、参加登録などの一部を業者に依頼することを考えている。開催時期、オンラインでの参加や発表の可否などについて会員にアンケートをとって 8 月下旬までに開催方法や費用等を精査し、オンライン開催の最終判断を評議員会・総会に諮る予定である。なお、アンケートは総会参加登録と同じグーグルフォーム上で行い、「会員マイページ」内からリンクを張って回答できるようにする予定である。

## (9) 大会運営規程の改訂

総会や学術講演会などが大会時に同時に開催できない場合が生じるため、大会運営規程を下記のように改訂する提案が執行部会から出され、審議の結果、承認された（改訂規約の全文は学会 HP の本学会の紹介→会則・規程の該当する規約を参照）。

（現行）

第 1 条 本会会則第 3 条に示される事業のうち、学術講演会、普及講演会、野外見学会（巡検）、業績・功勞の表彰等および第 8 条に定められた総会を実施するため、各年度に 1 回、本学会の大会を開催する。

（改訂案）

第 1 条 本会会則第 3 条に示される事業のうち、学術講演会、普及講演会、野外見学会（巡検）、業績・功勞の表彰等および第 8 条に定められた総会を実施するため、各年度に 1 回以上、本会の大会を開催する。

## (10) 「第四紀研究」年間発行号数の変更について

「第四紀研究」年間号数を削減する下記案が執行部会から提案され、その方針について審議した結果、承認された。なお、本提案は 2020 年度第 1 回総会審議事項となる。

この数年来、「第四紀研究」の編集・出版にかかわる諸問題を整理し、電子投稿ならびに受理原稿の電子メールでの送付を可能にするなど、執筆者の負担軽減化を行ってきたが、投稿数は有意に増加せず、特集号に依存する傾向が高い。しかし、特集号の企画も少なくなってきた、直近に欠号の可能性が懸念される。そのため、「第四紀研究」を 2021 年より年 4 回（3、6、9、12 月）発行に変更したい。

ただし、「第四紀通信」は連絡事項が頻繁にあるうえに、それに代わるメーリングリストでの配信やホームページでの閲覧ができない会員がいるなどの理由から、現行どおり年 6 回（2、4、6、8、10、12 月）発行のままとする。

これらの変更により、会誌（第四紀研究）印刷費は概算で年間 45 万円（税別）ほど減少するが、逆に現在第四種郵便料金で発送している学術刊行物（第四紀研究）とその付録（第四紀通信）が、「第四紀通信」単独の 4 号分料金については、普通郵便料金扱い（ゆうメール利用で 86 円/通で計算）となってしまいうため、逆に概算で 25 万円（税別）ほど増加する。トータルとしては 20 万円程度の予算削減となる。

将来的には、「第四紀研究」は web 上での掲載（オンラインジャーナル）とし、「第四紀通信」の内容

は、学会ホームページ内の会員限定サイト（会員マイページ）を利用する方向で、検討を進めていく。

### (11) 2020 年度会費減免

2020 年度会費の減免を行う下記提案が執行部会からなされ、審議の結果、承認された。

新型コロナウイルス感染症の影響による会員の経済的な負担を考慮し、2020 年度会費の減免を行うことを提案する。正会員のうち学生・院生で登録している会員（学生または院生として新入会または継続届を提出したもの）の 2020 年度会費を全額免除する。新型コロナウイルス感染症に対する自粛等にもとない収入が著しく減少した正会員（学生・院生で登録している人を除く）に対しては、会費減免申請を行い、承認され次第、2020 年度会費を免除または減額する。国や地方自治体等の支援金・補助金等（1 人当たり 10 万円の特別定額給付金を除く）を受給したことがわかる書類等、証拠となるものを添付の上、2021 年 1 月末までに提出してもらい、会計委員会で審査する。半額あるいは全額を免除する。

### (12) 会員名簿廃止・web 上での会員限定公開案

会員名簿作成に代わって、会員が公開可とした会員情報を「会員マイページ」内で閲覧できるシステムに変更する下記案が、執行部会から提案され、その方針について審議した結果、承認された。なお、本提案は 2020 年度第 1 回総会審議事項となる。

これまで会員名簿は 3～4 年に一度印刷公表してきた。しかし、会員の所属先・連絡先変更、入退会などが頻繁に行われているため、掲載されている情報が大きく変わっていることが多い。また、会員名簿の情報変更と印刷・発送費などで、2017 年版作成時には 180 万円余りの費用が生じている。会員情報は会員自らが会員マイページを利用して登録情報をいつでも変更することができる。その情報の中で公開してもよい項目を選んで登録しておく、会員マイページ内で会員限定で公開するようであれば、会員名簿を新たに印刷する必要はなくなる。このシステムを構築するのに必要な経費は 17 万円ほど（さらに検索機能などを付けると 17 万円ほど追加費用がかかる）。情報更新費は月額 5,000 円程度なので、会員名簿印刷発行よりも経費ははるかに抑えられる。なお、2017 年度及び 2018 年度予算から名簿作成積立金として合計 60 万円がすでに用意されている。公開する項目は、

既存の会員名簿に公開されているものに限定し、初期値としてはすべて非公開として、会員自らがその後会員マイページに入って設定しなおすものとする。2020 年度内にシステムを完成し、公開することにしたい。会員名簿に記載されていた学会の会則・規則や歴史などの情報は、ホームページから pdf で入手可能なようにしたい。

### (13) オンライン担当者の設置について（庶務委員・行事委員追加の承認）

下記のように、オンライン担当者を庶務委員会、行事委員会内におき、それぞれ 1 名の委員を追加する提案が執行部会から出され、審議の結果、承認された。

今後オンラインでの会議や講演会・発表会が増えてくるので、その中心となる担当を決めておいたほうがよい。特に専用アプリのライセンスを学会が保有することになると、その管理をする人が必要である。併せて、様々なシステム・アプリの使いやすさ、セキュリティなども検討してもらい、アプリの使い方のマニュアルを作ってもらうことが主な業務である。専門知識あるいは適性があるので、新たに庶務委員になってもらい、担当してもらうことにしたい。今後は、講習会・講演会などの行事に全国の会員が参加しやすいようにオンラインで開催することが望ましいため、行事委員会にもオンライン担当者を追加で配置する。

庶務委員会委員：高橋尚志会員（東京都立大学、領域 2）

行事委員会委員：村田昌則会員（東京都立大学、領域 2）

### (14) 2020 年度評議員会議長・議長代理、論文賞選考委員長の決定

評議員会議長・議長代理、学会賞選考委員、論文賞選考委員は、基本的には年度単位で交代となる。ただし、学会賞選考委員長は会長ですでに確定しており、論文賞選考委員長は評議員のなかから選出することになっている。その他の委員はその後、領域からの推薦をもとに評議員会で承認されることになる。

2020 年度評議員会議長・議長代理、論文賞選考委員会委員長を、審議の結果、下記のように決定した。

2020 年度評議員会議長：兵頭政幸評議員

2020 年度評議員会議長代理：須貝俊彦評議員

2020 年度論文賞選考委員会委員長：百原 新評議員

## ◆日本第四紀学会 2020 年度第 1 回評議員会議事録

日時：2020 年 8 月 28 日（金）14:00～15:30  
方法：Zoom システムを使ったオンライン会議

出席者：齋藤文紀（会長）、鈴木毅彦（副会長）、高原 光（副会長）、以下評議員：兵頭政幸（議長）、池原 実、池原 研、中川 毅、横山祐典、片岡香子、荻谷愛彦、小岩直人、穴倉正展、白井正明、須貝俊彦、丹羽雄一、藤原 治、青木かおり、岡田 誠、里口保文、長橋良隆、水野清秀、出穂雅実、江口誠一、北村晃寿、工藤雄一郎、近藤恵、齋藤めぐみ、百原 新、小荒井 衛、目代邦康、山田和芳（以上 31 名）

委任状：8 通（議長委任）

オブザーバ：久保田好美・高橋尚志（庶務委員会）

鈴木毅彦副会長による開会の辞、齋藤文紀会長の挨拶に続き、定足数の確認が行われ、兵頭政幸議長により以下の議事が進められた。高原 光副会長の閉会の辞により評議員会は終了した。

### (1) 2019 年度事業報告

資料 1 に基づき、各担当委員会委員長、領域代表が報告事項の説明を行った（欠席の場合は水野清秀庶務委員長が代読）。

### (2) 2019 年度決算報告・会計監査報告

齋藤めぐみ会計委員長から資料 2 に基づき、決算報告が行われた。また、会計監査、松浦秀治会員及び久保純子会員から会計監査報告とコメントが音声付きパワーポイントで提出され、水野庶務委員長が操作、代読を行った。

### (3) 日本学術会議・INQUA 関連報告

資料 3 に基づき、齋藤文紀会長から報告が行われた。

### (4) 2020 年度事業計画

資料 4 に基づき、担当各委員会委員長、領域代表が事業計画案の説明を行った（欠席の場合は水野庶務委員長が代読）。審議の結果、事業計画案は承認された。

### (5) 2020 年度予算案

資料 5 に基づき、齋藤会計委員長から 2020 年度予算案の説明が行われ、審議の結果、承認された。

### (6) 委員の承認

下記、4 つの 2020 年度の委員会に関する委員候補者について、水野庶務委員長から説明があり、それぞれについて審議の結果、全員が承認された（2020 年度役員・委員一覧は資料 6 参照）。

### 1) 2020 年度学会賞選考委員

委員長 齋藤文紀（領域 1）

委員 山崎晴雄（領域 2）、長橋良隆（領域 3）、  
小野 昭（領域 4）、遠藤邦彦（領域 5）

\* 下線部分は、顕彰規程上確定している委員（会長及び前会長）。

### 2) 2020 年度論文賞選考委員会委員

委員長 百原 新（領域 4）

委員 奥野淳一（領域 1）、高田将志（領域 2）、  
箱崎真隆（領域 3）、山田和芳（領域 5）

\* 下線部分は、既に 2019 年度第 2 回評議員会での審議で確定している委員（委員長）。

### 3) 2020 年度選挙管理委員会委員

委員 石輪健樹（領域 1）、杉戸信彦（領域 2）、  
佐藤善輝（領域 2）、納谷友規（領域 3）、  
橋詰 潤（領域 4）

### 4) 2020 年度オンライン大会実行委員会委員長

2020 年度大会はオンラインで開催する予定である。執行部会を中心に大会を運営することとし、会長 齋藤文紀会員を大会実行委員会委員長とする。

## 【資料 1】

2019 年度事業報告（2019 年 8 月 1 日～2020 年 7 月 31 日；一部 2020 年 8 月中旬までの経過報告）

### 1-1 庶務委員会（委員長：水野清秀）

1) 総会（1 回）・評議員会（2 回；そのうち 1 回はオンライン会議）・執行部会（6 回；そのうち 2 回はオンライン会議）を開催した。また、電磁的な評議員会（メール審議）を 3 回、電磁的な執行部会（メール審議）を 4 回開催した。

2) 入退会の申し出への対応を行い、会員名簿の管理を行った。2019 年度末（2020 年 7 月 31 日）における会員数は以下の通りである。

正会員 997 名（うち学生会費適用者 16 名）、賛助会員 9 社、名誉会員 16 名。

逝去会員：黒川勝己会員、小林巖雄会員、堂口諭会員

3) 会員登録情報の管理を行った。

4) 若手学生発表賞受賞者選考、学会賞・学術賞・若手学術賞受賞者選考、論文賞・奨励賞受賞者選考、名誉会員候補者・功労賞受賞者選考に関する業務を行った。

5) 転載許可申請に関する業務を行った（転載許可 3 件）。

6) シンポジウム等の共催・後援に関連する業務を行った（共催 1 件、後援 4 件）。

7) オンラインによる総会・評議員会等の会議方法について検討を行い、オンライン担当委員を追加した。



- 8) 第2回評議員会において論文賞・奨励賞選考に関する内規、名誉会員候補者選考規程、大会運営規程の改訂を行った(第2回評議員会議事録(3)(6)(9))。
- 9) 「デジタルブック最新第四紀学」等の在庫物品の扱いについて検討を行った。
- 10) 受け入れ図書・資料の整理を行った。
- 11) その他、学会活動に関する庶務業務を行った。

### 1-2 会計委員会 (委員長：齋藤めぐみ)

- 1) 会計に関する承認業務を行った。
- 2) 新型コロナウイルス感染症の影響による経済的な負担が大きい会員には、2020年度の会費減免を行うこととした。
- 3) 2019年総会において、2018年度の収支決算を報告し、2019年度の予算案を提案した。
- 4) 2019年度の収支決算を行い、2020年総会において報告する準備を行った。
- 5) 会計監査を受けた。
- 6) 2020年度の予算原案を作成した。

### 1-3 編集委員会 (委員長：北村晃寿)

- 1) 第四紀研究第58巻第5号(論説2編、35頁)、第6号(特集号1編、総説1編、46頁)を刊行した。第58巻の総頁数は396頁である(参考：第57巻237頁、第56巻274頁、第55巻273頁、第54巻367頁)。第59巻第1号(論説2編、29頁)、第2号(口絵1編、受賞記念論文1編、書評2編、23頁)、第3号(受賞記念論文1編、書評2編、21頁)、第4号(論説1編、書評1編、15頁)を刊行した。
- 2) 2020年8月21日現在、受理済み原稿(書評を除く)は3編(第59巻第5・6号に掲載)、手持ち原稿は論説8編、短報2編、総説1編、資料1編である。なお、特集号・雑録・書評を除く投稿数は、2019年は23編(2018年:37編、2017年:17編、2016年:22編、2015年:12編、2014年:17編)であった。
- 3) 編集委員会規程の一部改正を評議員会に諮り、承認された(20190823)。
- 4) 執筆要項の一部改正を行った(20200107)。
- 5) 「第四紀研究」年間発行号数を6号から4号に削減し、発行月を3、6、9、12月とすることを評議員会に諮り、承認された(20200709)。
- 6) メール編集委員会を14回(2019年8月5日～8月9日、8月17日～8月24日、10月18日～10月25日、12月28日～2020年1月6日、1月8日～1月14日、3月13日～3月20日、4月16日～年4月23日、5月15日～5月22日、5月27日～6月3日、6月7日～6月14日、6月16日～6月23日、8月2日～8月9日、8月11日～8月18日、8月12日～8月19日)開催した。
- 7) J-STAGEによる電子ジャーナル化を行っており、2020年8月3日現在、第58巻第3号までのアッ

プロードと公開が完了している。

- 8) 2019・2020年日本第四紀学会学術賞受賞者に受賞記念論文を依頼した。第58巻以降に掲載予定である。
- 9) 2019・2020年度の編集委員の交代を行った。
- 10) 領域3の編集委員を1名追加した(20200331)。

### 1-4 広報委員会 (委員長：白井正明)

- 1) 「第四紀通信」の編集および学会ホームページ、メーリングリストの維持管理を行った。
- 2) 「第四紀通信」第26巻5、6号、第27巻1、2、3、4号を編集し、発行した。
- 3) 上記「第四紀通信」各号の電子版(pdf版)を、それぞれ発行前月の下旬に日本第四紀学会ホームページに掲載した。
- 4) 日本第四紀学会ホームページを通じて広報、情報提供等を行った。
- 5) ホームページ内の「だいよんきQ&A」には、長い間新たに回答するに値する質問が来なかったため、執行部会での審議を踏まえて2020年3月に新たな質問の受付を停止した。
- 6) 日本第四紀学会会員メーリングリストを通じて広報、情報提供等を行った。
- 7) 日本第四紀学会評議員会メーリングリストおよび日本第四紀学会執行部会メーリングリストの管理を行った。
- 8) 庶務委員会と協力して、各委員会および各領域のメーリングリストを新たに作成し、管理を行った。

### 1-5 行事委員会 (委員長：藤原 治)

- 1) 日本第四紀学会2019年大会を2019年8月23日～26日に千葉科学大学マリーナキャンパスで開催した。
- 2) 日本第四紀学会2020年大会を2020年8月に大阪市立大学ほかで開催する準備を行った。新型コロナウイルス感染症の影響のため、大阪大会は2021年度に持ち越すこととした。
- 3) 日本第四紀学会2020年大会をオンラインで開催する準備を行った。このために「会員マイページ」を通じてオンラインでの大会開催についてアンケートを行った。
- 4) 学会賞・学術賞受賞記念講演会を2020年2月29日に帝京平成大学中野キャンパスで開催予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響のため延期した。

### 1-6 渉外委員会 (委員長：小荒井 衛)

- 1) JpGU-AGU Joint Meeting 2020(7月12日～16日)にセッション『第四紀一ヒト・環境系の時系列ダイナミクス』、『活断層と古地震』を提案し、オンラインで実施した。
- 2) 防災学術連携体の活動に参加し、12月24日(火)に行われた「令和元年台風19号に関する緊

急報告会」で小森次郎会員が発表を行った。また、「防災学術連携シンポジウム低頻度巨大災害を考える」が2020年3月18日に開催され、インターネット公開中継された。第四紀学会からは鈴木毅彦会員が講演を行った。

3) 日本ジオパーク委員会の活動に協力した。

### 1-7 領域1「気候変動及び海洋の諸プロセス」(領域代表：横山祐典)

1) 台湾の第四紀研究に関連した学会と日本第四紀学会との連携に関して、国立台湾大学のChan-Chou Shen 特別教授と齋藤会長がダブリンのINQUAにて会合を行った。その際にまずは分野の近い領域1との合同のシンポジウムなどを行ってはどうかということで合意に至り、2020年のJpGU-AGU 合同の大会でのユニオンセッションの提案を行うことになった。JpGUは幕張での学会はキャンセルになり、海外からの来日参加者はなくなったが、セッション自体はiPosterでの開催を行った。

### 1-8 領域2「陸上の諸プロセス」(領域代表：奥村晃史)

1) 2020年JpGU-AGU ジョイントミーティングにセッションを提案することを検討したが、領域2のメンバーが提案する既存・新設のセッションが数多く開かれるため、セッションの開催は見送り、関連するセッションへの参加を促すこととした。

2) 領域2のテーマで大会時、あるいは独自にシンポジウムを開催することを検討したが、新型コロナウイルス感染症の影響のため、まだ具体的な計画ができていない。来年度の開催を引き続き検討する。

### 1-9 領域3「層序と年代基準」(領域代表：里口保文)

1) 第四紀学会HPでの「日本の国際的第四系」の解説ページの作成を進めた。トップページ、玄武洞の解説ページの案ができていない。千葉セクション、水月湖についてはまだできていない。

### 1-10 領域4「人類と生物圏」(領域代表：工藤雄一郎)

1) 縄文時代早期の遺跡と古環境をテーマとしたシンポジウムを計画中であったが、新型コロナウイルス感染症問題により延期となった。

### 1-11 領域5「現代社会に関わる第四紀学」(領域代表：小森次郎)

1) 2019年大会(2019年8月23日～26日)において、共催組織である銚子ジオパーク推進協議会と企画立案・調整を行った。

2) 第5回ジオパークシンポジウム「仙台・宮城

の自然環境の成り立ちとその管理方法」を2019年12月14日(土)10:00～16:10に、東北学院大土樋キャンパスにおいて開催した。日本ジオパークネットワークを共催としたもので、参加者は約30名であった。

### 【資料2】

2019年度決算報告・会計監査報告(P20～22参照)

### 【資料3】

日本学術会議・INQUA 関連報告

韓国釜山で2020年1月17日に開催されたIUGS(国際地質科学連合)の理事会において、「千葉セクション」が下部・中部更新統境界の「国際標準模式断面とポイント：GSSP」に、Chibanianが中部更新統と中期更新世の階(Stage)と期(Age)として、また亜統(Subseries)と亜世(Subepoch)として中部更新統(Middle Pleistocene)と中期更新世(Middle Pleistocene)が承認された。更に同理事会により1月30日には、上部更新統(Upper Pleistocene)と後期更新世(Late Pleistocene)、ジェラシアンとカラブリアンから構成される下部更新統(Lower Pleistocene)と前期更新世(Early Pleistocene)が亜統(Subseries)と亜世(Subepoch)として承認された。Chibanianの地質年代単元名の日本語名称としては、チバニアン階とチバニアン期とすることが2月5日に報告されている(産業技術総合研究所ホームページ)。これらにより、第四系と第四紀は、完新統と完新世、更新統と更新世、これらが上部・中部・下部及び後期・中期・前期の亜統と亜世に3分された。更に階と期として、完新統と完新世は、メガラヤン、ノースグリッピアン、グリーンランディアンに、更新統と更新世は、未決定の上部と後期、チバニアン、カラブリアンとジェラシアンとなることに決まった。日本学術会議では、2020年3月に「チバニアン」に関するシンポジウムをIUGS分科会が中心となり企画していたが、新型コロナウイルス感染症の影響により開催されていない。

日本学術会議第24期は、2020年9月末に会期を終え、10月からは第25期が開始される。

### 【資料4】

2020年度事業計画

#### 1-1 庶務委員会

1) オンライン会議を中心とした総会・評議員会・執行部会の開催に関連する業務を行う。

2) 入会、退会者の確認を行うとともに、会員名簿の管理を行う。

- 3) 会員公開情報閲覧・検索システムを構築し、会員マイページ内で会員に限定して情報を公開する（総会審議事項（11）参照）。
- 4) 選挙管理委員会を設置し、2021-2022年度会長・副会長・評議員の選挙を実施する。
- 5) 学会賞・学術賞・若手学術賞の受賞者選考および論文賞・奨励賞の受賞者選考に関する業務を行う。
- 6) 転載許可申請への対応を行う。
- 7) 学会・シンポジウム等の共催・後援に関連する業務を行う。
- 8) 必要に応じて規程・内規の改定・制定を行う。
- 9) その他学会活動に関する庶務業務を行う。

### 1-2 会計委員会

- 1) 会計に関する承認業務を行う。
- 2) 2020年度総会において、2019年度の収支決算を報告し、2020年度の予算案を提案する。
- 3) 会計監査を受ける。
- 4) 会費減免に関する業務を行う。
- 5) 長期的な財政事情を考慮し、年会費が妥当な額か検討する。
- 6) 在庫物品の管理を行う。

### 1-3 編集委員会

- 1) 「第四紀研究」第59巻第5号、6号、第60巻第1号、2号を編集し、定期刊行する（総会審議事項（10）参照）。また、J-STAGEを通じて、電子ジャーナルとしての刊行を行う。
- 2) 「第四紀研究」編集・出版に関わる諸課題を整理し、順次その検討・見直しを進め、可能なものから改善を実施する。

### 1-4 広報委員会

- 1) 「第四紀通信」第27巻5号、6号、第28巻1号、2号、3号、4号を編集し、発行する。
- 2) 上記「第四紀通信」各号の電子版（pdf版）を、それぞれ発行前月の下旬に日本第四紀学会ホームページに掲載する。各ファイルを保存し、アーカイブ化を継続する。
- 3) 日本第四紀学会ホームページを管理し、広報、情報提供、アウトリーチ活動等を行う。
- 4) 日本第四紀学会会員メーリングリストを通じて各種情報提供等を行う。
- 5) 日本第四紀学会評議員会メーリングリストおよび日本第四紀学会執行部会メーリングリストの管理を事務局と共同で行う。
- 6) 各委員会および各領域のメーリングリストの管理を行う。

### 1-5 行事委員会

- 1) アンケート結果も考慮して、2020年度大会・発表会をオンラインで開催する。会期は2020年12月26日（土）・27日（日）を予定する。オン

ラインでの大会へ向け、執行部会および関係する委員会で協力する。

- 2) 学会賞・学術賞受賞者講演会を実施する。
- 3) 日本第四紀学会2021年大会を2021年8月に大阪市立大学ほかで開催する予定で、関係者間で検討し、その準備を行う。

### 1-6 渉外委員会

- 1) 日本地球惑星科学連合における日本第四紀学会の認知度と活動度を高めるために、連合大会セッションについて、『第四紀：ヒトと環境系の時系列ダイナミクス』と、『活断層と古地震』を第四紀学会が開催し、第四紀学会員の発表の場を用意するとともに、第四紀学に関連するセッションとの連携・共催を積極的にすすめる。
- 2) 防災学術連携体、自然史学会連合等、国内関連学協会との連携を高めていく。

### 1-7 領域1「気候変動及び海洋の諸プロセス」

- 1) 国立台湾大学のChan-Chou Shen教授と領域1の横山会員とで企画している国際誌ELEMENTAの人新世特集号の編集を進める。
- 2) 愛媛大学の加会員が中心となって企画している人新世シンポジウム（2021年2月もしくは3月。場所：東京大学大気海洋研究所講堂予定）を共同で実施することにしている。

### 1-8 領域2「陸上の諸プロセス」

- 1) 2021年日本地球惑星科学連合大会に「陸上の諸プロセス」に関するセッション提案を検討する。
- 2) 2021年日本第四紀学会での「陸上の諸プロセス」に関するシンポジウム開催を検討する。
- 3) 領域2の研究成果の第四紀研究、国際学術誌、国際学会での報告を推進する。

### 1-9 領域3「層序と年代基準」

- 1) 「日本の国際的第四系」の解説ページの公開、年代学（とくに放射性炭素年代、年輪年代）についてのシンポジウムを検討する。ただし、新型コロナウイルス感染症の問題があるため、その方法についての検討も必要となる。

### 1-10 領域4「人類と生物圏」

- 1) 縄文時代早期の遺跡と古環境をテーマとしたシンポジウムを開催すべく準備する。

### 1-11 領域5「現代社会に関わる第四紀学」

- 1) オンラインセミナー「現代社会における第四紀学」の開催を検討中である。

### 【資料5】

2020年度予算案（P23参照）

## 【資料2】 2019年度決算報告

2019年度収支会計報告  
(2019年8月1日～2020年7月31日現在)

収入の部					(単位:円)
科目	2019年度予算①	2019年度決算②	増減②-①	執行率②/①	摘要
会費収入	9,340,000	8,988,562	-351,438	96.2%	正会員981名、学生会員16名、賛助9社(2020年7月31日現在)
正会員会費収入	9,100,000	8,788,562	-311,438	96.6%	通常会員会費8,671,000円 学生会員会費84,000円 海外会員会費33,562円
賛助会員会費収入	240,000	200,000	-40,000	83.3%	20,000円×9社(10口)
誌代	1,100,000	1,217,480	117,480	110.7%	2019年大会要旨集売上(177,000円)、定期雑誌購入、Back No
別刷代・超過頁代収入	750,000	578,664	-171,936	77.1%	58巻4号～59巻3号別刷・カラー・超過頁代等
雑収入	100,000	724,677	624,677	724.7%	2019年大会余剰金(579,588円)、デジタルブック(82,212円)、JST、著作権料収入等
利子収入	1,000	909	-91	90.9%	預金利息
広告料収入	20,000	15,000	-5,000	75.0%	2019年大会予稿集(2社)
役員選挙積立金取崩収入	0	0	0		
INQUA対策積立金取崩収入	0	0	0		
名簿作成積立金取崩収入	0	0	0		
予備費積立金取崩収入	0	0	0		
収入合計	11,311,000	11,524,692	213,692	101.9%	
前期繰越金	16,710,274	16,710,274	0	100.0%	
合計	28,021,274	28,234,966	213,692	100.8%	

支出の部					(単位:円)
科目	2019年度予算①	2019年度決算②	増減②-①	執行率②/①	摘要
会誌発行費	4,301,200	3,904,042	-397,158	90.8%	
印刷費	2,500,000	2,391,278	-108,722	95.7%	第四紀研究 58巻4号～59巻3号
編集費	400,000	200,534	-199,466	50.1%	
編集人件費	1,201,200	1,201,200	0	100.0%	編集書記手当
別刷印刷費	200,000	111,030	-88,970	55.5%	第四紀研究 58巻4号～59巻3号
会誌・会報発送費	550,000	428,440	-121,560	77.9%	第四紀研究 58巻4号～59巻3号
会報発行費	830,000	746,291	-83,709	89.9%	
印刷費	550,000	459,336	-90,664	83.5%	第四紀通信 26巻4号～27巻3号
編集費	70,000	72,255	2,255	103.2%	第四紀通信編集費
編集人件費	210,000	214,700	4,700	102.2%	第四紀通信編集アルバイト代
学会HP運営費	170,000	121,110	-48,890	71.2%	HP更新アルバイト代、ドメイン更新料等
大会運営準備金	380,000	0	-380,000	0.0%	2020年大会延期の為
巡検準備金	100,000	0	-100,000	0.0%	2020年大会延期の為
講演会・シンポジウム費	100,000	0	-100,000	0.0%	学会賞学術賞記念講演会延期の為
予稿集印刷費	150,000	159,840	9,840	106.6%	2019年大会講演要旨集
学会賞等顕彰費	45,000	32,551	-12,449	72.3%	賞状作成費(学術賞・論文賞・若手発表賞等)
会議費	20,000	0	-20,000	0.0%	
通信費	380,000	211,796	-168,204	55.7%	会費請求書発送費、事務通信費等
旅費・交通費	600,000	332,868	-267,132	55.5%	執行部会等交通費等
印刷費	440,000	390,385	-49,615	88.7%	学会専用封筒、コピー代、総会資料等
業務委託費	2,400,000	2,147,283	-252,717	89.5%	事務委託費
領域活動費	750,000	19,750	-730,250	2.6%	
領域1	150,000	0	-150,000	0.0%	
領域2	150,000	0	-150,000	0.0%	
領域3	150,000	0	-150,000	0.0%	
領域4	150,000	0	-150,000	0.0%	
領域5	150,000	19,750	-130,250	13.2%	12/14開催シンポジウム施設使用料
INQUA対策費	0	0	0		
役員選挙費	0	0	0		
名簿作成費	0	0	0		
INQUA対策積立金繰入支出	0	0	0		
役員選挙費積立金繰入支出	250,000	250,000	0	100.0%	
名簿作成積立金繰入支出	0	0	0		
予備費積立金繰入支出	0	1,300,000	1,300,000		
加盟学協会分担金支出	60,000	60,000	0	100.0%	地球惑星科学連合、自然史学会連合分担金、防災学術連携体
国際科学技術コンテスト協賛金支出	50,000	50,000	0	100.0%	国際地学オリンピック協賛金
雑費	50,000	18,708	-31,292	37.4%	振込手数料等
予備費	30,000	0	-30,000	0.0%	
支出合計	11,656,200	10,173,064	-1,483,136	87.3%	
次期繰越金	16,365,074	18,061,902	1,696,828	110.4%	
合計	28,021,274	28,234,966	213,692	100.8%	

**貸借対照表**  
(2020年7月31日現在)

(単位：円)

借 方		貸 方	
科 目	金 額	科 目	金 額
流 動 資 産		流 動 負 債	
郵便振替	3,692,284	未払金	2,290
小口現金	521,075	前受会費	180,093
普通預金	13,416,633		
現金(事務局)	95,456	小 計	182,383
未収金	468,657	正 味 財 産	
仮払金	180	名簿作成積立金	600,000
固 定 資 産		役員選挙積立金	250,000
定期預金	10,000,000	INQUA対策積立金	300,000
		予備費積立金	8,800,000
		次期繰越金	18,061,902
		(前期繰越金)	16,710,274)
		(当期収支差額)	1,351,628)
		小 計	28,011,902
合 計	28,194,285	合 計	28,194,285

**財産目録**  
(2020年7月31日現在)

資 産 の 部			(単位：円)
科 目	摘 要	金 額	
郵便振替	郵便局(年会費振込専用口座)	3,692,284	
小口現金	編集書記手許金	521,075	
普通預金	みずほ銀行早稲田支店	13,209,409	
普通預金	三井住友信託銀行本店営業部	207,224	
現金	事務局手持ち金	95,456	
未収金	誌代、別刷代・超過頁代収入	468,657	
仮払金	旅費交通費過払い分	180	
流動資産合計		18,194,285	
定期預金	三井住友信託銀行本店営業部	10,000,000	
固定資産合計		10,000,000	
合 計		28,194,285	

負 債 の 部			(単位：円)
科 目	摘 要	金 額	
未払金	旅費交通費	2,290	
前受会費	2020年度以降年会費	180,093	
合 計		182,383	

正 味 財 産 の 部			(単位：円)
科 目	摘 要	金 額	
名簿作成積立金	名簿作成積立金	600,000	
役員選挙積立金	役員選挙積立金	250,000	
INQUA対策積立金	INQUA対策積立金	300,000	
予備費積立金	予備費積立金	8,800,000	
次期繰越金		18,061,902	
	前期繰越金	16,710,274	
	当期収支差額	1,351,628	
合 計		28,011,902	

2019 年度会計監査報告

日本第四紀学会

会長 齋藤文紀 殿


2019 年度会計監査報告書

日本第四紀学会 2019 年度収支決算報告書 (2019 年 8 月 1 日～2020 年 7 月 31 日) の監査を行い、予算の執行、帳簿、証票の整理等、正常適正に処理されていることを確認いたしました。

ここにご報告いたします。

以上

2020 年 8 月 20 日

会計監査 久保純子 

2020 年 8 月 20 日

会計監査 松浦秀治 

## 【資料5】2020年度予算案

2020年度予算案  
(2020年8月1日～2021年7月31日)

収入の部 (単位:円)

科 目	2019年度予算	2019年度決算	2020年度予算案	摘 要
会費収入	9,340,000	8,988,562	9,029,000	
正会員会費収入	9,100,000	8,788,562	8,829,000	正会員981名、学生会員16名(2020年7月31日現在)
賛助会員会費収入	240,000	200,000	200,000	20,000円×9社(10口)
誌代	1,100,000	1,217,480	1,000,000	要旨集売上、定期雑誌購入、Back No
別刷代・超過頁代収入	750,000	578,064	550,000	59巻4号～6号、60巻1号～2号別刷代
雑収入	100,000	724,677	100,000	JST、著作権料収入等
利子収入	1,000	909	1,000	預金利息
広告料収入	20,000	15,000	0	大会予稿集広告掲載料
役員選挙積立金取崩収入	0	0	250,000	
INQUA対策積立金取崩収入	0	0	0	
名簿作成積立金取崩収入	0	0	450,000	
予備費積立金取崩収入	0	0	0	
収入合計	11,311,000	11,524,692	11,380,000	
前期繰越金	16,710,274	16,710,274	18,061,902	
合計	28,021,274	28,234,966	29,441,902	

支出の部 (単位:円)

科 目	2019年度予算	2019年度決算	2020年度予算案	摘 要
会誌発行費	4,301,200	3,904,042	3,901,200	
印刷費	2,500,000	2,391,278	2,250,000	第四紀研究 59巻4号～6号、60巻1～2号 各1,200部
編集費	400,000	200,534	300,000	
編集人件費	1,201,200	1,201,200	1,201,200	編集書記手当
別刷印刷費	200,000	111,030	150,000	第四紀研究 59巻4号～6号、60巻1～2号
会誌・会報発送費	550,000	428,440	800,000	第四紀研究 59巻4号～6号、60巻1～2号
会報発行費	830,000	746,291	785,000	
印刷費	550,000	459,336	500,000	第四紀通信 27巻4号～6号、28巻1～3号 各1,100部
編集費	70,000	72,255	75,000	編集ソフト契約料等
編集人件費	210,000	214,700	210,000	第四紀通信編集アルバイト代
学会HP運営費	170,000	121,110	170,000	HP更新アルバイト代、ドメイン更新料等
大会運営準備金	380,000	0	840,000	2020年オンライン大会(46万円)・2021年大会運営準備金(38万円)
巡検準備金	100,000	0	100,000	2021年大会
講演会・シンポジウム費	100,000	0	100,000	シンポジウム・受賞記念講演会開催費
予稿集印刷費	150,000	159,840	300,000	2020年オンライン大会・2021年大会講演要旨集 (各15万円)
学会賞等顕彰費	45,000	32,551	130,000	賞状作成費・副賞等
会議費	20,000	0	60,000	ZOOMライセンス利用代、会議室使用代
通信費	380,000	211,796	380,000	会費請求書発送郵税、事務通信費等
旅費・交通費	600,000	332,868	100,000	執行部会・委員会等交通費
印刷費	440,000	390,385	440,000	学会専用封筒、コピー代
業務委託費	2,400,000	2,147,283	2,400,000	事務委託費概算払分
領域活動費	750,000	19,750	750,000	15万円*5領域
領域1	150,000	0	150,000	
領域2	150,000	0	150,000	
領域3	150,000	0	150,000	
領域4	150,000	0	150,000	
領域5	150,000	19,750	150,000	
INQUA対策費	0	0	0	
役員選挙費	0	0	600,000	
名簿作成費	0	0	450,000	
INQUA対策積立金繰入支出	0	0	0	
役員選挙費積立金繰入支出	250,000	250,000	0	
名簿作成積立金繰入支出	0	0	0	
予備費積立金繰入支出	0	1,300,000	0	
加盟学協会分担金支出	60,000	60,000	60,000	地球惑星科学連合、自然史学会連合分担金、防災学術連携体
国際科学技術コンテスト協賛金支出	50,000	50,000	50,000	国際地学オリンピック協賛金
雑費	50,000	18,708	50,000	振込手数料等
予備費	30,000	0	30,000	
支出合計	11,656,200	10,173,064	12,496,200	
次期繰越金	16,365,074	18,061,902	16,945,702	
合計	28,021,274	28,234,966	29,441,902	

【資料 6】

2019-2020 年度役員・委員一覧 (2019 年 8 月 1 日～2021 年 7 月 31 日)

会 長	齋藤文紀	
副会長	鈴木毅彦	高原 光
会計監査	久保純子	松浦秀治
領域 1	領域代表	横山祐典
	領域幹事	阿部彩子、池原 研、池原 実、川幡穂高、中川 毅
領域 2	領域代表	奥村晃史
	領域幹事	片岡香子、荻谷愛彦、小岩直人、穴倉正展、白井正明、須貝俊彦、丹羽雄一、藤原 治、堀 和明、三浦英樹
領域 3	領域代表	里口保文
	領域幹事	青木かおり、卜部厚志、岡田 誠、長橋良隆、兵頭政幸、水野清秀
領域 4	領域代表	工藤雄一郎
	領域幹事	出穂雅実、江口誠一、海部陽介、北村晃寿、近藤 恵、齋藤めぐみ、堤 隆、那須浩郎、百原 新
領域 5	領域代表	小森次郎
	領域幹事	植木岳雪、小荒井 衛、竹村恵二、目代邦康、山田和芳、米澤正弘
庶務委員会	委員長	水野清秀
	委員	久保田好美、吾妻 崇、高橋尚志、江口誠一、前杢英明
会計委員会	委員長	齋藤めぐみ
	委員	阿部彩子、三浦英樹、青木かおり、植木岳雪
編集委員会	委員長	北村晃寿
	委員	中川 毅、荻谷愛彦、松多信尚、里口保文、下岡順直、亀井 翼、米澤正弘
広報委員会	委員長	白井正明
	委員	オブラクタ ステューブン フィリップ、兵頭政幸、那須浩郎、植木岳雪
行事委員会	委員長	藤原 治
	委員	池原 実、村田昌則、岡田 誠、井上 淳、目代邦康
渉外委員会	委員長	小荒井 衛 (防災学術連携体)
	委員	山田和芳 (JpGU プログラム)、卜部厚志 (JpGU 環境災害対応)、百原 新 (自然史学会連合)、小森次郎 (地学オリンピック)、植木岳雪 (ジオパーク)
法務委員会	委員	池原 研、竹村恵二、中村俊夫、三田村宗樹、宮内崇裕
評議員会 (2019 年度)	議長	兵頭政幸
	議長代理	卜部厚志、須貝俊彦
学会賞選考委員会 (2019 年度)	委員長	齋藤文紀 (領域 1)
	委員	山崎 晴雄 (領域 2)、中村俊夫 (領域 3)、小野 昭 (領域 4)、竹村恵二 (領域 5)
論文賞選考委員会 (2019 年度)	委員長	池原 研 (領域 1)
	委員	穴倉正展 (領域 2)、長橋良隆 (領域 3)、紀藤典夫 (領域 4)、黒木貴一 (領域 5)
名誉会員候補者選考委員会 (2019 年度)	委員長	奥村晃史 (領域 2)
	委員	岡崎浩子 (領域 1)、公文富士夫 (領域 2)、百原 新 (領域 4)、米田 穰 (領域 4)
評議員会 (2020 年度)	議長	兵頭政幸
	議長代理	須貝俊彦
学会賞選考委員会 (2020 年度)	委員長	齋藤文紀 (領域 1)
	委員	山崎晴雄 (領域 2)、長橋良隆 (領域 3)、小野 昭 (領域 4)、遠藤邦彦 (領域 5)
論文賞選考委員会 (2020 年度)	委員長	百原 新 (領域 4)



	委員	奥野淳一（領域 1）、高田将志（領域 2）、箱崎真隆（領域 3）、山田和芳（領域 5）
選挙管理委員会（2020 年度）	委員	石輪健樹（領域 1）、杉戸信彦（領域 2）、佐藤善輝（領域 2）、納谷友規（領域 3）、橋詰 潤（領域 4）
2020 年オンライン大会実行委員会	委員長	齋藤 文紀

## ◆日本第四紀学会 2020 年度第 1 回総会議事録

日時：2020 年 8 月 29 日（土）14:00～15:50  
 方法：Zoom システムを使ったオンライン会議

藤原 治行事務委員長による開会の辞、高橋尚志庶務委員による Zoom システムの使い方の説明、齋藤文紀会長の挨拶に続き、定足数の確認が行われ、参加正会員数 47 名（最終的な参加者数は 51 名）、委任状 146 通（すべて議長委任）で成立条件を満たしていることが水野清秀庶務委員長より報告された。議長に池原 研会員を選出し、以下の議事が進められた。最後に高原 光副会長の閉会の辞により総会は終了し、表彰式に引き継がれた。なお、オンラインシステムの運営は、久保田好美・高橋尚志両庶務委員および村田昌則行事務委員により行われた。

### (1) 2019 年度事業報告

資料 1（2020 年度第 1 回評議員会資料と同じ、以下同様）に基づき、水野庶務委員長が説明を行い、承認を受けた。

### (2) 2019 年度決算報告・会計監査報告

齋藤めぐみ会計委員長から資料 2 に基づき、決算報告が行われた。また、会計監査、松浦秀治会員及び久保純子会員から会計監査報告とコメントが音声付きパワーポイントで提出され、水野庶務委員長が操作、代読を行った。これらの報告は承認された。

### (3) 学会賞・学術賞・若手学術賞選考報告

### (4) 論文賞・奨励賞受賞論文・受賞者選考報告

### (5) 功労賞受賞者選考報告

上記 3 件の報告を、水野庶務委員長が行い、承認された（原報告は、2019 年度第 2 回評議員会議事録参照、また詳細は本号の学会賞・学術賞・若手学術賞受賞者選考報告、論文賞・奨励賞受賞論文受賞者選考報告及び功労賞受賞者選考報告参

照）。

### (6) 日本学術会議・INQUA 関連報告

資料 3 に基づき、齋藤文紀会長から報告が行われた。

### (7) 2020 年度事業計画

資料 4 に基づき、水野庶務委員長が説明を行い、2020 年度のオンライン大会については藤原行事務委員長が補足説明を行った。審議の結果、事業計画案は承認された。

### (8) 2020 年度予算案

資料 5 に基づき、齋藤会計委員長から 2020 年度予算案の説明が行われ、審議の結果、承認された。

### (9) 名誉会員の承認

2019 年度第 2 回評議員会において名誉会員候補者とされた岩田修二会員、海津正倫会員、吉川周作会員の推薦理由などの説明が水野庶務委員長から行われ、審議の結果、3 名が名誉会員として承認された（推薦理由などの詳細は次号第四紀通信に掲載予定）。

### (10) 「第四紀研究」年間発行号数の削減について

「第四紀研究」の発行号数を年 4 回とする提案（原案は、2019 年度第 2 回評議員会議事録参照）が、北村晃寿編集委員長から説明され、審議の結果、承認された。

### (11) 会員名簿廃止・web 上での会員限定公開について

会員名簿に代わって、会員が公開可とした会員情報を「会員マイページ」内で閲覧できるシステムに変更する提案（原案は、2019 年度第 2 回評議員会議事録参照）が、水野庶務委員長から説明され、審議の結果、承認された。

## ◆日本第四紀学会 2020 年度第 1 回執行部会議事録

日時：2020 年 8 月 6 日（木） 15:00～17:00  
方法：Zoom システムを使ったオンライン会議  
出席者：齋藤文紀（会長）、鈴木毅彦（副会長）、  
高原 光（副会長）、水野清秀（庶務）、  
齋藤めぐみ（会計）、北村晃寿（編集）、  
白井正明（広報）、横山祐典（領域 1）、  
奥村晃史（領域 2）、里口保文（領域 3）、  
工藤雄一郎（領域 4）  
オブザーバ：永峯菜穂子（事務局）、久保田好美・  
高橋尚志（庶務委員会）

### 主な報告事項

(1) 2020 年度第 1 回総会・評議員会の参加登録・委任状提出フォームをグーグルフォームを用いて作成し、「会員マイページ」内にリンクを張って、web 上で登録できるようにした。併せて大会に関するアンケートも同じサイトから回答できるようにした。また、会員 ML ならびに学会 HP を使って、総会参加登録・アンケート提出を呼び掛けた。  
(2) 学術賞、若手学術賞、論文賞、功労賞受賞者に受賞連絡とオンライン表彰式への出席依頼を行った。また、名誉会員候補者へも授賞予定である旨とオンライン表彰式参加依頼を行った。  
(3) 第四紀研究 59 巻 4 号（論説 1 編、書評 1 編）を刊行した。また 59 巻 5 号（論説 1 編、書評 1 編）の印刷工程中。8 月 4 日現在、受理済み原稿（書評を除く）は 1 編（59 巻 5 号に掲載）、手持ち原稿は論説 9 編、短報 2 編、総説 1 編、解説 1 編である。  
(4) 2019 年度収支会計報告を行った。収入では、2019 年大会の余剰金が約 58 万円と大きかった。新型コロナウイルス感染症リスク対策のため、当

初予定していた 2020 年大阪大会や学会賞・学術賞受賞記念講演会が延期となったことや、領域主催のシンポジウムなども年度内開催のめどが立たなかったことから行事関係の支出がほとんどなかった。また、執行部会をオンライン会議に変更したことから、旅費・交通費の節約となった。その結果、収入から支出を差し引いた差額は約 265 万円となった。

### 審議事項および意見交換

(1) 2020 年度活動計画と予算案について議論した。予算案では、2019 年度決算で繰越金が大幅に増加したことを受け、いくらかを予備費積立金に回すことにした。また、行事関係では、2020 年度に実施予定のオンライン大会分と 2021 年 8 月大阪大会との準備金・講演要旨集作成費の両方を計上することにした。そのほかに役員選挙費、会員名簿作成に代わる会員情報公開システム作成費などを計上し、オンライン会議推進に伴い旅費・交通費は大幅に減額することにした。  
(2) 2020 年度選挙管理委員会委員候補について、過去の委員経験者や領域からの推薦などに基づき、執行部会から推薦する 5 名の候補者を確定した。  
(3) 2020 年度学会賞選考委員会委員ならびに論文賞選考委員会委員の候補者について、各領域からの推薦状況を確認した。  
(4) 2020 年度総会・表彰式の担当者・進行について意見交換を行った。  
(5) オンラインでの研究発表会における公衆送信権などの著作権について意見交換を行い、今後 JpGU などのオンライン発表会での事例を集めて検討することにした。

## ◆日本第四紀学会 2020 年度第 2 回執行部会議事録

日時：2020 年 8 月 21 日（金） 10:00～12:00  
方法：Zoom システムを使ったオンライン会議  
出席者：齋藤文紀（会長）、鈴木毅彦（副会長）、  
高原 光（副会長）、水野清秀（庶務）、  
齋藤めぐみ（会計）、北村晃寿（編集）、  
藤原 治（行事）、白井正明（広報）、  
小荒井 衛（渉外）、横山祐典（領域 1）、  
奥村晃史（領域 2）、里口保文（領域 3）、  
工藤雄一郎（領域 4）、小森次郎（領域 5）  
オブザーバ：永峯菜穂子（事務局）、久保田好美・  
高橋尚志（庶務委員会）

### 主な報告事項

(1) 2020 年度第 1 回総会・評議員会の参加登録・委任状提出、大会アンケートを 8 月 20 日まで延長した。フォームへの回答者延べ 206 名、うち総会参加者正会員 56 名、委任状提出者 145 名（全員総会議長委任）。評議員会参加者 26 名、委任状提出者 9 名（全員評議員会議長委任）。  
(2) 転載許可申請 1 件を承認した。  
(3) 論文賞等選考、学会賞等選考過程のスケジュール・手順などをまとめたマニュアル案を作成した。  
(4) 2019 年度会計監査を受けた（8 月 20 日）。主

な指摘事項は、会費納入率が高い、新型コロナウイルス感染症の影響による学会活動の停留はやむを得ない、収支バランスと学会活動・会員サービスとの兼ね合いが課題、予備費積立金を増やしてもよい（1年間の基礎活動費に相当する額）といった点。総会・評議員会では音声付きPPTでコメントを流す。

(5) 第四紀研究第59巻第5号(論説1編・書評1編)の印刷工程中。8月18日現在、受理済み原稿(書評を除く)は2編、手持ち原稿は論説8編、短報2編、総説1編、解説1編、資料1編である。

### 審議事項

(1) 大会アンケートの結果を反映し、オンラインで大会を行うことにした。年度末は試験・入試などが入ってくるため、12月26日・27日を予定する。口頭・ポスターの両方を行う(発表賞選考も)。

また学会賞・学術賞受賞記念講演会も併せて実施する予定で進める。要旨集(PDFで公開)、著作権とセキュリティなどについてはさらに検討することにした。オンライン大会は初めての試みであり、執行部会が中心となり各委員会にも協力してもらい、大会実行委員長を齋藤会長として進める。(2) 2020年度第1回総会・評議員会資料は8月25日頃には会員マイページ内に掲載することとし、現在未提出の項目はそれまでに確定する。遅くとも、評議員会(8月28日)までにはすべての審議事案を確定する。

(3) オンライン評議員会・総会・表彰式での進行、分担について確認した。表示する資料はPPTで庶務委員長に集約することとした。オンライン総会の接続テスト・打ち合わせを、8月21日(執行部会後)と27日などに行うことにした。

## ◆所属領域の変更手続きと会員マイページの利用推進について

次期の会長・副会長・評議員を決める役員選挙が2021年3月～4月頃に実施される予定です。各領域の評議員の定数は、2021年2月1日時点での各領域に所属する正会員の数によって決定されます。日本第四紀学会領域規程(<http://quaternary.jp/intro/rules/ryouiki.html>)第4条により、ご自身の所属領域を変更したい方は、今年の10月1日から12月31日までの間なら、変更することができます。この期間を逃すと、領域を変更できるのは2年後になります。領域を変更したい方は、今年10月1日～12月31日の間にメールまたは郵送で事務局に変更依頼をすることができますが、会員マイページにてご自身でも変更可能です。会員マイページは、今後役員選挙で使用するほか、今年度中にシステムを構築する予定の会員情報の閲覧などでも利用するため、使い方に慣れていただくことをお勧めします。領域の指定がなされていない会員は、そのままでは実質的に選挙権・被選挙権ともありませんので、領域の選択をお願いします。また、所属先や住所などの変更があった方も、会員マイページを利用して会員情報の更新をすることができます。

会員マイページから領域など個人情報を変更する方法は以下の通りです。第四紀学会ホームページ(<http://quaternary.jp>)トップにある「会員マイページ」ボタンをクリックし、会員ID番号(会費請求書あるいは会誌が入った封筒の会員宛名の下に書かれている10桁の数字)とパスワードを入力し、ログインしてください。次に「会員情報更新」→「会員情報の変更」ボタンをクリックして、修正ください。パスワードをお忘れの方は、会員マイページの「パスワードをお忘れの方へ」のところをクリックして、会員ID番号と登録している電子メールアドレスを入力して送信すると、登録しているメールアドレスにパスワード変更用のアドレスが送信されます。会員ID番号が不明の方は、第四紀学会事務局([daiyonki\(at\)shunkosha.com](mailto:daiyonki(at)shunkosha.com))あてにご自身の氏名、メールアドレス、第四紀学会会員であることを証明する所属先・現住所などの情報を記して、お問い合わせください。会員ID番号とパスワードは各自で控えておいていただくようにお願いします。

(庶務委員会)

★★★ 第四紀学会に情報をお寄せください ★★★

日本第四紀学会では、第四紀通信のほか、メーリングリスト (ML)、ホームページ (HP) を用いて情報発信をしております。メール本文に配信内容のタイトルと簡単な情報を書いて広報委員会アドレス (jaqua-koho(at)quaternary.jp) へご投稿ください。

情報発信の手段として、ML の積極的な使用をお願いします。ML へのご投稿についての詳細は、第四紀通信 27 巻 2 号の巻末をご覧ください (下記の通り HP でも閲覧可能です)。第四紀通信には主催・後援イベントなど第四紀学会として会員に広く周知する必要があると認められる情報を、HP には主催・後援イベントなどのほか「公募・助成」情報等を掲載します。詳しくは広報委員会アドレス宛に、個別にご相談ください。

第四紀通信は偶数月 1 日刊行予定としていますが、奇数月下旬には版下を HP (<http://quaternary.jp/>) にアップしていますのでご利用ください。

日本第四紀学会広報委員会

日本第四紀学会事務局

〒169-0072 東京都新宿区大久保 2 丁目 4 番地 12 号 新宿ラムダックスビル

株式会社春恒社 学会事業部内

E-mail : daiyonki(at)shunkosha.com 電話 : 03-5291-6231 FAX : 03-5291-2176